

# 松尾町山室城跡

—急傾斜地崩壊対策事業地内埋蔵文化財調査報告書—

1992

千葉県土木部  
財団法人 千葉県文化財センター

# 松尾町山室城跡

—急傾斜地崩壊対策事業地内埋蔵文化財調査報告書—



1992

千葉県土木部  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県北東部は、多くの河川によって樹枝状に谷が開析された下総台地と太平洋をのぞむ九十九里平野によって豊かな自然環境に恵まれており、原始・古代からの多くの遺跡が残されています。中世においても多くの武士団が活躍し、県内でも城館跡の密度が非常に高い地域です。

この樹枝状に開析された台地の岩盤はもろい泥砂岩であり、崖崩れの起こり易い地形・地質です。それを未然に防ぐために急傾斜地にはコンクリートの擁護壁工事が必要となっていました。今回調査した松尾町山室にある工事対象地は、過去に小規模な崖崩れを起こしている地点であり、隣接した西側斜面については近年の崖崩れの後に工事が施工されています。千葉県土木部は急傾斜地崩壊対策事業として急斜面部1800m<sup>2</sup>の工事を計画し、工事範囲内における埋蔵文化財の所在の有無について千葉県教育委員会に照会をしたところ、当地点は周知の遺跡としての山室城跡内である旨の回答を得ました。そこで、埋蔵文化財の取扱いについて千葉県教育委員会と千葉県土木部で協議したところ、遺跡の現状保存を図ることは難しいため、やむを得ず記録保存の措置を講じることに決定しました。記録保存にあたっては財團法人千葉県文化財センターが調査機関の指定を受け、千葉県教育委員会の指導により千葉県との間に発掘調査の委託契約を締結し、平成3年4月に発掘調査を行うことになりました。

発掘調査の結果、小規模な調査ながら、城に伴う土坑3基、出入口施設1カ所が検出されたほか、戦国時代の山城の大規模な造成過程が当時の陶器をはじめとした多くの遺物を伴って明らかにすることができ、学術的にも大変貴重な成果を得ることができました。さらには築城によって一部破壊された縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺構に伴っていたと思われる遺物も検出され、山室城の造られた台地に長期にわたって人々の生活が営まれたことが明らかとなりました。

今回整理作業が終了し、その成果をここに刊行する運びとなりました。本書が、学術的資料としてはもとより、広く多くの方々に活用され、歴史の解明、文化財の保護・普及に役立つことを願ってやみません。

最後に、千葉県土木部、千葉県教育委員会、松尾町教育委員会及び地元の方々の多大なる御指導・御協力に深くお礼申し上げるとともに、発掘調査・整理作業に御協力いただいた調査補助員の皆様に心からお礼申し上げます。

平成4年3月

財團法人 千葉県文化財センター

理事長 岩瀬 良三

## 凡　　例

1. 本書は千葉県山武郡松尾町山室1109他に所在する山室城跡（遺跡コード407-003）の発掘調査報告書である。
2. 調査は千葉県土木部の急傾斜地崩壊対策事業に先立ち、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は平成3年4月9日から4月30日まで、整理作業は平成3年5月1日から5月31日までの期間であり、調査部長天野 努、部長補佐阪田正一、班長宮重行の指導のもとに技師井上哲朗がおこなった。
4. 本書の執筆・編集は井上がおこなった。
5. 本書で使用した地図は国土地理院発行5万分の1地形図、参謀本部陸軍部測量局作成測量図、成田都市計画図である。
6. 山室城跡の全体概念図は井上が作成したものである。
7. 山室城跡東端部測量図・概念図は本来、工事用測量図であるが、山武土木事務所の御好意により、測量業者（株）ふき測量への具体的指示は井上がおこなった。
8. 方位はすべて座標軸である。
9. 遺物実測図の断面は土器は白抜き、陶磁器は黒く塗りつぶした。また、破片の実測・拓影図は、基本的には外面を断面図の左に、内面を右側に図示したが、擂鉢については例外とした。
10. 遺物の色調は、1988年版『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）によるが、記号は省略した。
11. 航空写真は（株）京葉測量が昭和42年に撮影したものを購入したものである。
12. 現地調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から御指導・御協力をいただいた（敬称略）。深く謝意を表します。  
山武土木事務所、松尾町教育委員会、中世城郭研究会、千葉城郭研究会、岩沢利正、滝川恒昭、中井正代、小野正敏

# 目 次

## 序 文

## 凡 例

1. 調査に至る経緯	1
2. 位置と地理的環境	1
3. 歴史的環境	2
4. 山室城の構造	6
5. 調査の方法と経過	11
6. 検出遺構	12
7. 出土遺物	17
8. 結語	25

## 挿 図 目 次

Fig. 1 山室城跡の位置と周辺の城館跡	Fig. 2 山室城跡周辺の地形
Fig. 3 山室城跡概念図	Fig. 4 山室城跡東端部測量図・概念図
Fig. 5 飯櫃城跡概念図	Fig. 6 調査区全体図
Fig. 7 A区調査風景	Fig. 8 A区平面図・断面図
Fig. 9 B・C区平面図・断面図	Fig. 10 SK-3 平面図・断面図
Fig. 11 D区平面図・断面図	Fig. 12 SK-1, 2 平面図・断面図
Fig. 13 出土遺物実測・拓影図(1)	Fig. 14 出土遺物実測・拓影図(2)
Fig. 15 出土遺物実測・拓影図(3)	Fig. 16 出土遺物実測・拓影図(4)
Fig. 17 A区遺物分布図	Fig. 18 銭貨拓影図

## 表 目 次

Tab.1 銭貨計測表

## 図版目次

- PL. 1 山室城跡周辺航空写真
- PL. 2 (1) 山室城跡遠景（南東から） (2) 山室城跡遠景（北から）
- PL. 3 (1) A区調査前（北東から） (2) B区調査前（南西から）  
(3) C・D区調査前（西から）
- PL. 4 (1) 曲輪I東端部櫓台（西から） (2) 曲輪I内（東から）  
(3) 曲輪I内西側土壘（東から） (4) 曲輪I内北側土壘（東から）  
(5) 曲輪I北側帯曲輪（東から） (6) 曲輪I東側平場（西から）  
(7) 曲輪I南西の堅堀（南西から） (8) 曲輪I北西の堅堀（南西から）
- PL. 5 (1) 曲輪I・II間の空堀（南から） (2) 曲輪I・II間の空堀（北から）  
(3) 曲輪II内北側の土壘（南東から） (4) 曲輪II内の土壘（東から）  
(5) 曲輪II内の土壘・空堀（南東から） (6) 曲輪II内南側の土壘（北東から）  
(7) 曲輪II北側の空堀・土壘（北西から） (8) 曲輪II北西部の土壘・空堀（北から）
- PL. 6 (1) 曲輪II西側の土壘・空堀（北から） (2) 曲輪III内（北から）  
(3) 曲輪III内北西部の土壘（南東から） (4) 曲輪III西側の空堀（北から）  
(5) 曲輪II・III間の空堀（北東から） (6) 曲輪III西側の空堀（南から）  
(7) 曲輪III北側の空堀（北東から） (8) 曲輪I北側の段（東から）
- PL. 7 (1) A区全景（北東から） (2) A区全景（西から）  
(3) SX-1全景（東から）
- PL. 8 (1) SX-1（南から） (2) A区遺物出土状況（西から）  
(3) SK-3全景（東から）
- PL. 9 (1) B区全景（南西から） (2) B区深掘り個所（北東から）  
(3) C区全景（西から）
- PL. 10 (1) C区セクション及び遺物出土状況 (2) D区全景（南西から）  
(3) D区セクション及び遺物出土状況
- PL. 11 (1) D区セクション (2) SK-1全景（北東から）  
(3) SK-2全景（南東から）
- PL. 12 (1) 土器類（古代以前） (2) 内耳土鍋  
(3) 金属製品（鉄釘、銅鏡他）
- PL. 13 (1) かわらけ、瀬戸・美濃系陶器（外面） (2) かわらけ、瀬戸・美濃系陶器（内面）
- PL. 14 (1) 常滑A～F類（外面） (2) 常滑A～F類（内面）
- PL. 15 (1) 常滑G～K類（外面） (2) 常滑G～K類（内面）

## 1. 調査に至る経緯

千葉県内の台地は中小河川によって樹枝状に谷が解析され、斜面は急勾配を呈する。さらにその地山はかつて海中で形成された砂・粘土・軟質な泥砂岩であり、大量の降雨によって土砂崩れの起こり易い地形である。特に当山武地域は過去に山崩れの多い地域であり、それを未然に防ぐために急傾斜地にはコンクリートの擁護壁工事が必要となってきた。今回の対象地はかつて小規模な土砂崩れを起こしている地点であり、既に西側は擁護壁工事が終了している。そこで、千葉県土木部は急傾斜地崩壊対策事業として急斜面部1800m<sup>2</sup>の工事を計画し、工事範囲内における埋蔵文化財の所在の有無について松尾町教育委員会との協議を経て、平成2年9月7日に千葉県教育委員会に照会をした。

千葉県教育委員会は、当地点は周知の遺跡としての山室城跡内である旨の回答をした。そこで、埋蔵文化財の取扱いについて千葉県教育委員会と千葉県土木部で協議したところ、急傾斜地崩壊対策事業の性格上、計画を変更して遺跡の現状保存を図ることは難しいため、止むを得ず記録保存の措置を講じることに決定した。記録保存にあたっては当文化財センターが調査機関の指定を受け、千葉県教育委員会の指導により千葉県との間に発掘調査の委託契約を締結し、平成3年4月から発掘調査を開始することになった。

## 2. 位置と地理的環境 (Fig. 1, 2)

山室城跡は山武郡松尾町山室に所在し、浅海性の砂層が隆起して木戸川とその支流の侵食及びローム層の堆積によって形成された標高40m程の台地南東端に占地する。県道横芝・山武線が城跡南側の谷を通って北方へ抜け、県道成田・松尾線と交差する。松尾町は千葉県の北東部に位置し、山武郡内でも北部である。北は芝山町、北東は横芝町、南東は蓮沼町、南は成東町、西は山武町にそれぞれ接するが、同城跡は印旛郡富里村とも近距離である。国道296号線・總武本線を境に北西側は標高30~40mの下総台地であり、南東側は九十九里平野が広がり太平洋を望む。松尾町の中心を流れる木戸川は成田市三里塚付近の谷を水源地として、房総半島の東側、九十九里平野の中央部を貫流し、多くの支流を合流しながら太平洋に注ぐ。その流路は約22kmで、小支谷が下総台地を樹枝状に開析し、その侵食谷群は肥沃な沖積平野を形成している。

木戸川が形成した沖積平野は古代より中世においても生産基盤として使用され、古代末以降、台地下に多くの集落が形成されたことが推測される。現在の字山室の集落である山室村も記録上は少なくとも17世紀（江戸時代初期）にまで遡る<sup>(1)</sup>。その中心部は、現在観音寺（真言宗・由緒は不詳）や村社である高野神社が存在し、城跡の東側に谷を隔てた対岸の台地の南側下に帶状に広がる集落と考えられる。屋号や地元の方の話によると、城跡の南側に並ぶ民家は東側の集落よりも比較的新しい集落であることが考えられる。

### 3. 歴史的環境 (Fig. 1, 2)

**原始・古代** 先土器時代については、木戸川上流域で多く確認されているが<sup>(2)</sup>、山室地区でもかつてポイントが表採されている。縄文時代には高谷川流域に姥山貝塚をはじめとする貝塚が多く形成されている。古墳時代の当地域には武社の国造が置かれ、木戸川流域の大堤古墳群中の權現塚古墳は奥津城に推定されている。奈良・平安時代は国造の統治域を受け継いだとみられる武射郡が置かれ、当時の集落跡は台地上に多くみられる。また、松尾町小川には重圓文鏡瓦を出土する小川廃寺跡が知られており、木戸川流域は古代から当地域の中心部であった。

**中世** 律令体制が衰退し、東国では桓武平氏が武士団を形成し、10世紀前葉の平将門の乱、11世紀末の平忠常の乱がおこり、房総では上総・千葉氏が勢力を伸長した。当時武射郡内は木戸川を境に武射北郷・南郷に分かれていたと推測されるが、在地土豪が両氏の支配下に組み込まれて領域支配が行われたとみられる。また、12世紀末に頼朝に所領を没収された平広常（上総氏）の遺領は相模國を本領とする土屋氏と千葉常胤に継承された。常胤の系列の千葉氏一族はその後、房総に多くの分家を配し発展する。また、中世山武地域は山辺庄・海保庄・山辺保・武射御郷<sup>(3)</sup>に分かれ、武射郡内では古代の11郷（『倭名類聚抄』）が殆ど消滅し14世紀頃には新たに18の郷や村が成立する<sup>(4)</sup>。これは開発の進展と共に集落も台地上から沖積地へ移動したことが考えられる。なお、山室地域は山辺庄古和郷に含まれていたことが推測されている。

**山室氏の登場** 山室氏の初見は「本土寺過去帳」内の「文明2年（1470）7月、山室法妙室僧、二木ニテ被打」の記事である。これにより少なくとも15世紀半ばには本土寺系の日蓮宗信徒である山室氏が存在し、松戸市二木付近で戦死した武士であることが確認される。山室氏は恐らく在地土豪層から発展していった領主と考えられる。また、永正2年（1504）11月15日に千葉妙見宮で行われた千葉介昌胤の元服式に「山室孫四郎」が、「引馬供分21人」の一人として参列している。共に参列した近隣の領主は井田氏、椎名氏、鍋木氏、三谷氏、海保氏、和田氏らであった（『千学集抄』他）。

戦国時代の山室氏については不詳であるが、宝暦6年（1756）年に書かれた『總州山室譜伝記』には「この時に鎮西八郎為朝の末孫なる山室飛驒守源朝臣昌隆、上総国武射郡山室村に居城す。上下総62城、知行高53万石の旗頭に在りければ、要害厳しくとて（天文元年（1532）同国飯糰村に城を築ける」という記述がある。いわゆる「戦記物」の類なので誇張等が考えられるが、16世紀半ばには山室氏の客将であった井田氏が独立して高谷川流域から栗山川流域へ本拠を移動しており、以降、両家は姻戚関係（対等）を結んだ（『神保文書』）事実がある。

16世紀後半の関東は上杉・武田・後北条らの戦国大名が霸権を争い、房総内でも先述の領主の他に千葉・原・武田・正木・土岐・里見氏らが同盟・離反を繰り返し、紛争が絶えなかった。永禄4年（1561）の上杉輝虎の関東南下時の「関東幕注文」（陣幕紋台帳）には里見一族の次

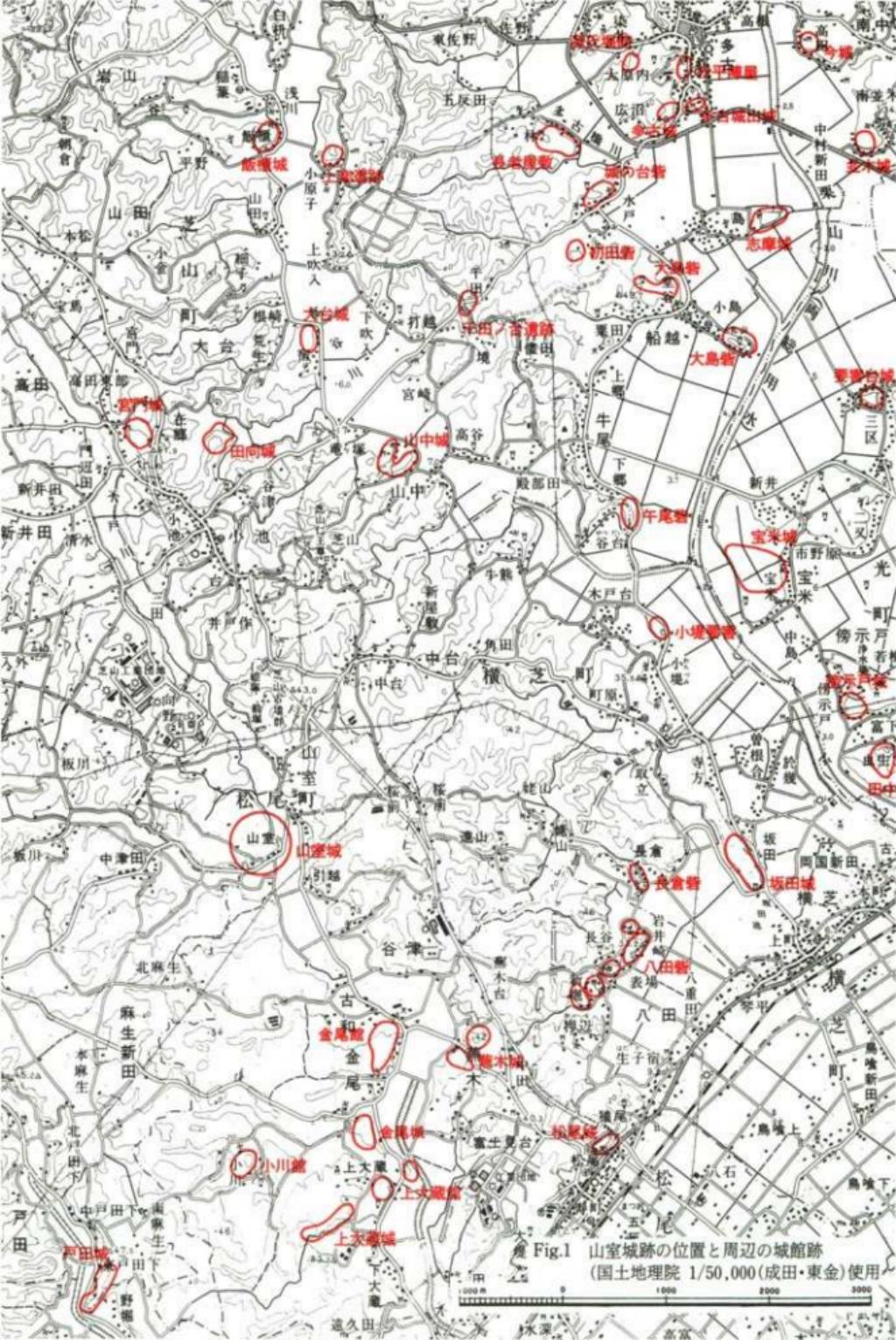


Fig.1 山室城跡の位置と周辺の城館跡  
(国土地理院 1/50,000(成田・東金) 使用)

に「上総衆」として酒井氏に並んで「山室治部少輔 ひしもつこうニにはひすそこ」と記載されており、当時山室氏は上杉方として里見氏に従っていたことが窺える。また、天正2年(1574)に海上八幡宮の御神事錢を負担した海上・匝瑳・番取の東總地域の在地領主が100~250文前後なのに対し上総の山室兵部丞が筆頭で、1000文という異例の負担(「海上八幡宮文書」<sup>118)</sup>であり、海上千葉氏との深い関係が推測される。また、天正5年(1577)年の唐竹妙光寺(多古町)の大乘妙典一千部読誦<sup>119)</sup>の交名中「結衆」の筆頭に「山室治部左衛門」の名があり、日蓮宗信徒として的一面を残している。

戦国末期には後北条氏による上下総支配が進行し、山室氏をはじめとする武射地域の領主も後北条体制下に組み込まれた。天正年代後半には山室宮内少輔が子息の孫四郎を人質として小田原城に差し出していた(「下総旧事」<sup>120)</sup>。そして、天正18年(1590)の豊臣秀吉による小田原城落城及び別動隊による房総の攻撃により、関東には徳川家康が入部し、多くの城はその機能を閉じていくことになる。

なお、「総州山室譜伝記」での山室氏の系譜は次の通りである。飛驒守常隆 山室城から飯櫃城へ移動。多古城主牛尾胤仲とたびたび合戦し、弘治元年(1555)、多古領を獲得。永禄11年(1568)没。越中守氏勝 「山室円城守」と注され、円城寺との関係が窺われる。元亀元年(1573)没。常陸守光勝 後北条に属する。天正18年、秀吉に抵抗し攻撃され、自刃。以降、光勝の子の系譜を引く家が残る。

**周辺の中世城館跡** 木戸川流域では8箇所が確認されている。宮門城跡は山室城跡の北方2kmに位置する東西150m程の小規模なものであり、土塁や段は神社に伴う可能性もある。蕪木城跡は在地領主蕪木氏の居城であり、多角雑形の3城が有機的に結合する形であったが、土砂採取により一部破壊された<sup>121)</sup>。金尾城・館跡、大蔵城・館跡は城としての字名は残るが、遺構としては不明瞭である。小川館跡は方形館が並ぶ様な3郭形式で、山麓には妙見神社が祭られ、千葉氏系の城館とみられる。最大の曲輪の一辺は約50mで全体の長辺は100m程度である。山室城より南のこれら集中する城館群は金尾の在地領主及び蕪木氏の系列と考えられ、山室城と直接関連を持つとみられる城館は確認できず、この発見はいまだに課題である。なお、蕪木氏は天正18年に豊臣方が調査した後北条方として「蕪木駿河守 かふらき城 三百騎」の記載があり(「北条家人數覚書」<sup>122)</sup>他)、戦国末期まで木戸川下流域を支配したようである。

また、後北条氏の被官として高谷川から栗山川流域に勢力をもつた井田氏が、明確な折り重みをはじめとする中世城郭としては完成した繩張り構造を持つ田向・大台・坂田城等の大規模城郭を有して周辺の城館を支城としたこと、また、山室氏の飯櫃城・蕪木城・和田氏の山中城・三谷氏の小堤要害等も栗山川以東の城館跡とは異なり、坂田城等に匹敵する複雑な構造・規模を持つことから、後北条氏や井田氏の影響下にあったことが推定されている<sup>123)</sup>。戦国末期の山室城については次章以降で考えてみたい。

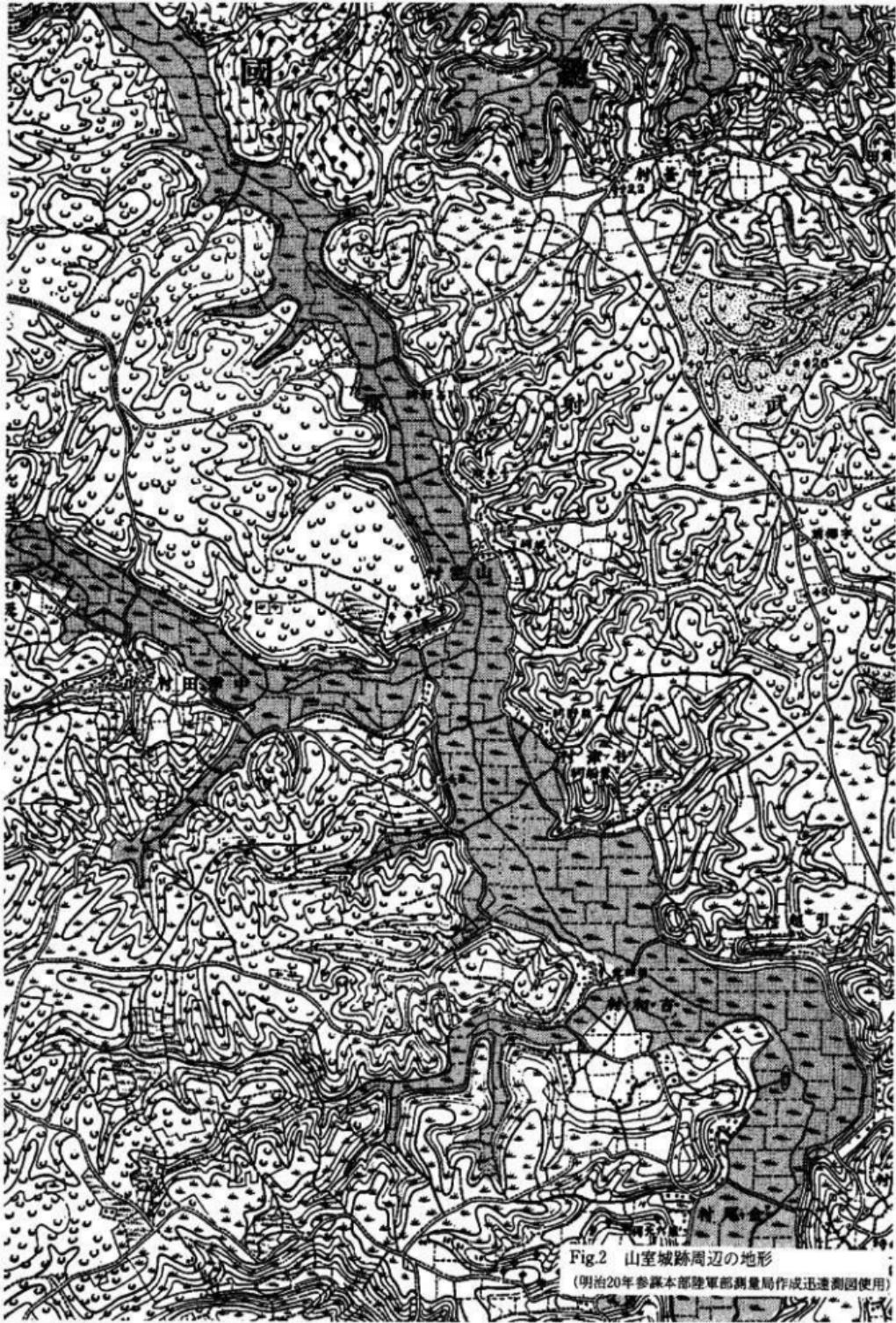


Fig.2 山室城跡周辺の地形

(明治20年参議本部陸軍部測量局作成迅速測図使用)

#### 4. 山室城の構造 (Fig. 3, 4)

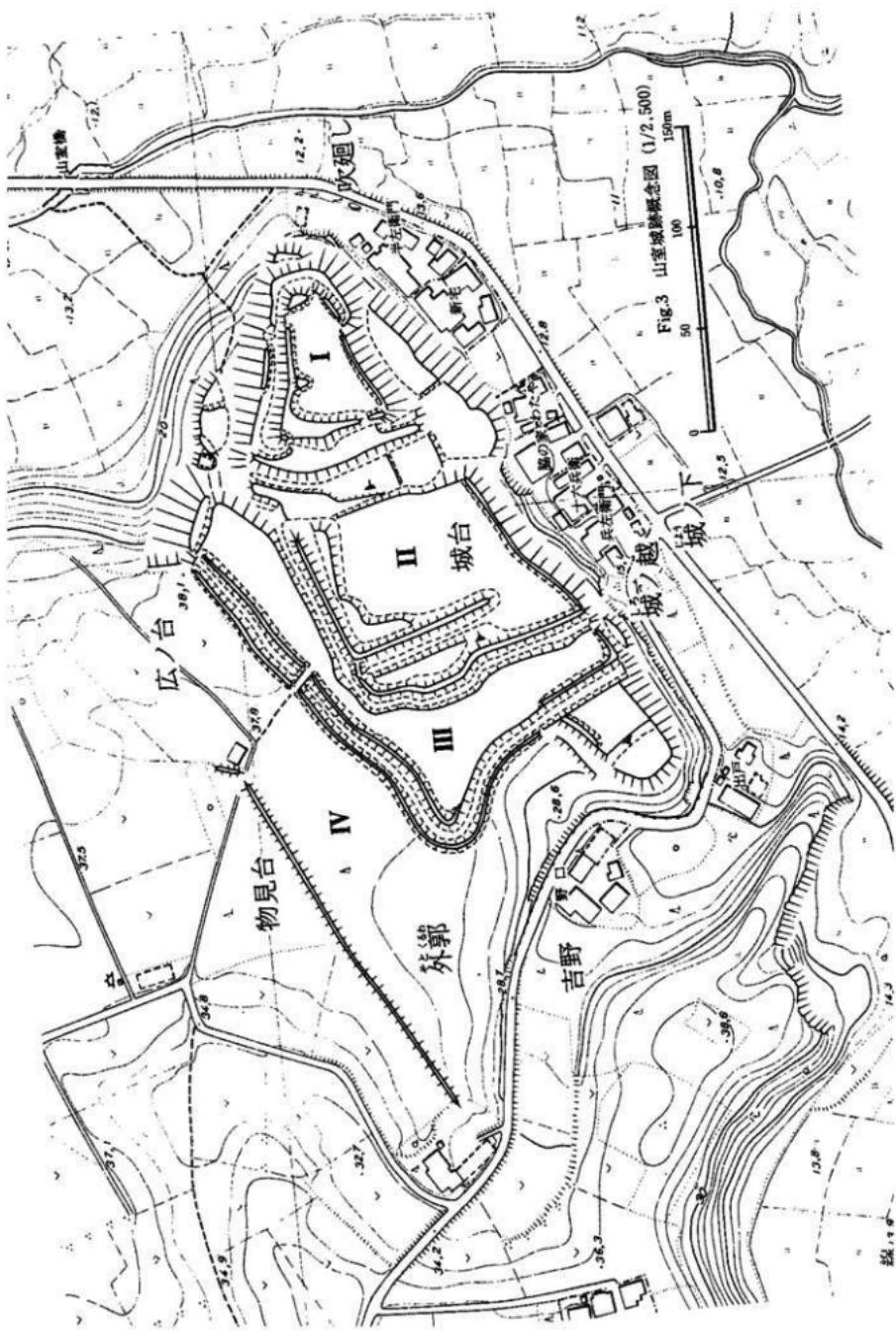
**概要** 山室城跡の明確な遺構が存在する範囲は、城跡が占地する台地先端部の南東部と南西部に小支谷が入るくびれ部分から先であり、東西約300m・南北約200m、やや北東—南西方向に長い大規模な城跡である。構造は、明確な遺構の残る小字「城台」部分（主要部）と台地基部側の小字「広ノ台」、「物見台」、「外郭」部に大きく分けて捉えられ、主要部は空堀によって3つの曲輪に分かれる。東端部をI、中心部をII、IIを囲むような帯状の部分をIII、IIIと台地を切り離す空堀の外側の台地上をIVと仮りに記号を付けることにする。

**曲輪 I** 東端部に位置する東西約70m・南北約50mの西辺の長い台形を呈する曲輪である。3つの曲輪のなかで最も高位置であり、縁辺部には土壘や塹が巡る。東端部には三角形状で高さ1.5m程の塹が存在し、東方の木戸川が流れる沖積地を望む櫓台としての機能を考えられる。また、西側は高さ2m程の、北側は高さ1m程の、南側は高さ0.5~0.7mの土壘である。また、これらの土壘に付属する施設として、北側の土壘の西寄りで内側へ若干突出する高まりがあり、曲輪内部を区画している。また、北西隅にも高い部分が存在し、北方に対する櫓台としての機能を考えられる。土壘の切れ目は東端寄りの南北に2カ所、西側のやや南寄りに1カ所あり、出入り口施設の存在が予想されたが、南側で発掘調査によって検出された。

**曲輪 I周辺** (帶曲輪他) 曲輪 I の南辺約50mを除き、約5m下には細長い平場（帶曲輪）が巡る。東端部は幅1~3mで弧状に巡り、北部は幅1~2mで一部には低土壘が存在し、堅堀によって一部が切れる。南辺については東端部の帶曲輪が途切れるが、発掘調査の結果、上の土壘の切れ目部分に出入り口施設が検出されたことから、北側の様に帶曲輪が存在し、それに連続していた可能性がある。西側には幅約10mの段を造り出しており、南北端には堅堀状施設が存在する。曲輪 I の西側の土壘の切れ目と通じる出入口施設の可能性を考えられる。

(腰曲輪他) 帶曲輪よりさらに5~10m下には南北側に幅10~15mの平場が存在する。北部は、不整形の段が谷の中腹に存在し、東の沖積地からの道が通じる。北西隅には土壘と小規模な堅堀状の平場が存在する。この地区は小口の一つである可能性を考えられる。また、南側の平場は発掘調査の結果、中世の面の上に相当量の土砂が堆積していることが判明した。その他、東端部の斜面途中には小規模な平場が存在するが、曲輪 I周囲の斜面は崖ともいえる急斜面であり、崩落だけではない人為的造成が考えられる。

**曲輪 I・II間の空堀** 上幅25~30m、下幅15~20m、長さ100m程という大規模なものであり、東端部（曲輪 I）を台地から大きく分離しているものである。曲輪 I の西側の段との比高は3m程あるが、曲輪 IIとの比高は中央部では0.5~1mしかなく、また、堀底は西北部で溝状の通路にはなっているが、全体に凹凸が激しく、曲輪 II側から緩やかに傾斜している。曲輪 IIの項で触れるが、後の大規模な改変が考えられる。



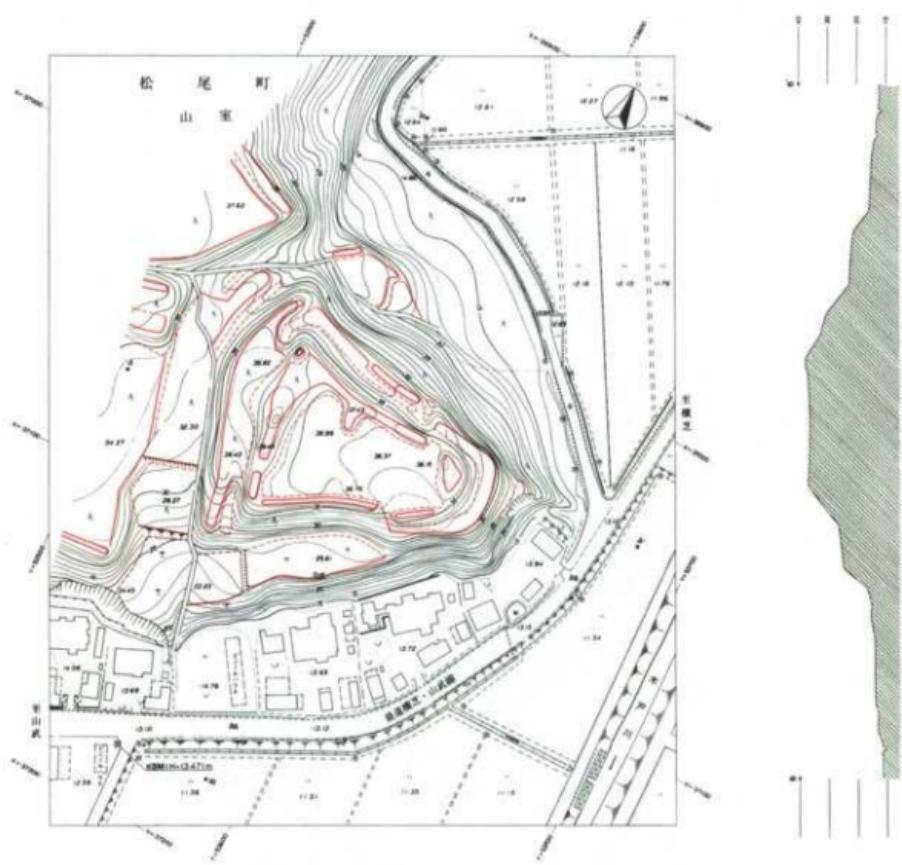


Fig.4 山室城跡東端部測量図・概念図

1/2,000

0 50 100m

**曲輪II** 位置的には当城の中心に存在する曲輪であり、西辺約110m・東辺約90m・北辺約90m・南辺約90mの台形を呈する。曲輪IIIとの境として空堀と土塁が存在する。北辺は約70mで西隅寄りで南方にも約70m伸びる。いずれも直線的であるが、西辺約110mは北側と西側のほぼ中心部でやや突出した折れを有し、新しい様相を示す。各部の規模は、周囲の空堀が曲輪IIIからの比高1~1.5mであるが、かなりの埋没が考えられる。土塁は曲輪II内からの比高3~4mあり、北から西側にかけては段を有する。一方、南辺の土塁は比高0.5~1mと低い。その下の斜面については近年の崖崩れの際にコンクリートの擁壁工事が施されているが、かつて踏査した方によると、崖崩れ以前は腰曲輪状の段と土塁が存在していたとのことである。なお、この曲輪IIの南側部分の小字は「城の越(腰)」である。曲輪II内については畠耕作の跡らしい溝が残っていること、現状では曲輪I・II間の空堀との比高がないことから曲輪IIが東側に対して無防備となってしまうこと等から、曲輪IIの東縁辺部については本来は土塁が存在したが後世崩されて、空堀が埋められた可能性が高い。

**曲輪III** 曲輪IIIの周囲の空堀とその両側の土塁は、台地先端部のくびれ部分を切る様に北東一南西方向に若干の折れを持ちながら横切り、北西部では突出し、西側は台地縁に沿って伸び、城の主要部の内外を区画する。北側で一部土塁が切れて空堀に土橋がかかる部分があり、曲輪III内を曲輪IIの外側の空堀に沿って東側の小支谷と結ぶ道が通っている。特にこの土塁の切れ目部分には小口的構造もみられないことから、後世の造成と考えられる。外側の土塁は比高1m程と低いが、内側のそれは曲輪III内から1.5~3mと高く、空堀底との比高は3~4mである。内側の土塁は突出した北西部あたりが最も比高があるが、谷が入り込む西側の部分は50m程途切れる。

**曲輪III周辺** 曲輪IIIの周辺部については、まず、北東端は曲輪I・II間の空堀が小支谷につながる個所で曲輪IIの南東端と同様非常に比高がある部分であり、北側には段が造られている。また、南端部についても斜面に段が存在する。これは曲輪IIの南側斜面にかつて存在したという段(腰曲輪)と連続するものであろう。

曲輪IIIの西側、台地の南北の突出部には土塁や段が存在するが、平場は緩やかな傾斜であり、地表面観察からは城としての造成とは言い難い。しかし、曲輪IIIの外側の空堀・土塁が北側の台地上では明確な主要部の内外を示しているので、南西部ではその空堀・土塁によって南北端突出部が取り残された形になりながらも西側を防衛する機能をもった地区と考えたい。

また、曲輪IIIの北に広がる台地上には高さ0.5m程・長さ200m程の低い土塁状の高まりが伸びるが、植林と畑地との境であり、現在の地境ではあっても城の防御機能としては抑えられない。しかしながら、先述の通り、「外郭」を始めとする城に関連するような小字が台地上に広い範囲で広がることから、主要部の外側の広い区画をも广義の城域として意識したことが考えられる。一般にこの様な広大な城域を意識した城は戦国時代末期以降にみられる。

**小口について** 後世の破壊のためか、明瞭な大手筋が不明である。いくつかの想定ができるルートは、西側の谷から突出部（屋号「出戸」の民家の上）の北側斜面を登って曲輪IIIに入る道、曲輪IIの北西の土塁・空堀の突出部から土塁間の通路状の部分を通って曲輪II内の南方に出る道、また、逆に東からは曲輪Iの北側の谷中の段を登って曲輪I・II間の空堀に入る道、曲輪I・II間の空堀の南側から入る道等である。

**小結** 山室城は構造的には古い部分と新しい部分が共存していると考えられる。恐らく、古い部分は台地の先端部であり、本来の山室の集落・耕地を眼下にする曲輪I及びその周辺であろう。その後曲輪IIが造られたが、曲輪IIの西側の屈曲した土塁・空堀はさらに後のものであり、同様に随所で屈曲する曲輪III外側の空堀・土塁、さらには外側の外郭部の造成もこの時期であろう。これらの新しい部分の造成は構造的には16世紀後半と考えられる。

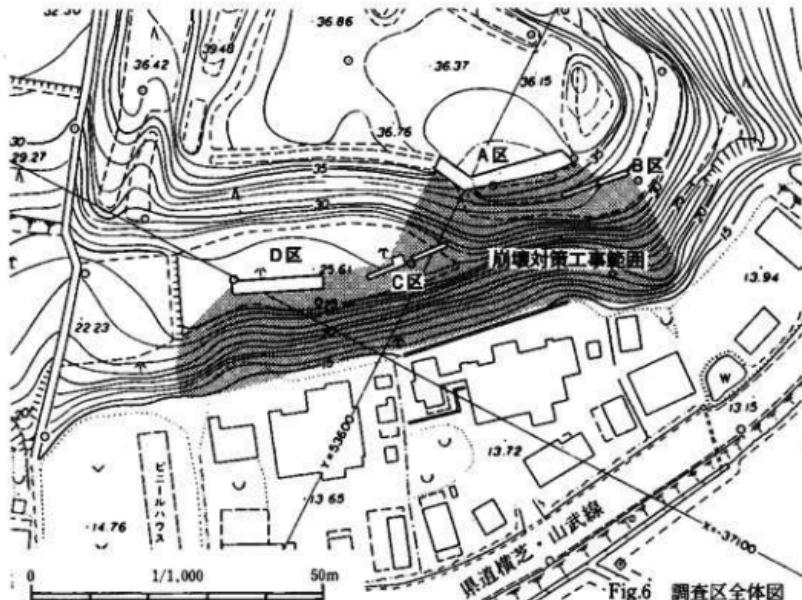
伝承（『山室譜伝記』）によると、山室氏が1532年により堅固な城をめざして山室城から移ったと伝えられる飯櫃城（Fig.5）が、台地先端部の主郭をII・III郭が囲むという山室城と基本的には同様な構造を持ちながら、後北条氏の影響と考えられるより明確な折り重みを始めとした充実した構造を持ち、「根小屋」「宿」等も想定されること等の相違点から、伝承は飯櫃城への移動後の山室城については触れていないが、山室城の16世紀前半の画期という点及び、両城共山室氏の築城である点は正しいかもしれない。



## 5. 調査の方法と経過 (Fig. 6)

急傾斜地崩壊対策事業としての擁護壁工事の範囲は、山室城跡の東端部南側斜面であり、主郭と考えられる曲輪およびその下の帯曲輪・腰曲輪などの一部がかかった。斜面部についても従来の中世城郭の発掘調査例から段・階段などの施設が検出されること、また、城の造成方法についても重要な知見を得ることなどが予想された。しかしながら、かつて小規模な崖崩れを起こしていること、斜面は文字どおり崖ともいえる急傾斜であること、そして直下に民家が存在することなどから、発掘調査は事故防止のために平場の縁辺部をある程度残して行わざるを得なかった。調査区は曲輪 I の南側縁辺部を A 区、帯曲輪南側を B 区、腰曲輪に C 区と D 区の計 4 個所に設定した。そして、A 区と B・C・D 区との間が最大比高 10m 以上もある急斜面であったため、移動の際の安全対策として鉄製の階段状足場を設置した。

それぞれの調査区は工事範囲の北辺を境として、城に伴う生活面・築城の前時代の遺構の有無・城の造成方法などの把握を目的として、まずトレンチ状に掘り始めた。C・D 区は調査前は地山を削り出した部分と予想して、表土除去後にある程度の拡張を予定していた。しかし、遺物を含む膨大な量の砂質土が人為的に埋没しており、トレンチ部分のみでも全て地山まで検出することは非常に危険があったため、同時に埋め戻しを行いながら部分的に掘り下げざるを得なかった。なお、調査終了後は全調査区で埋め戻しを行った。



## 6. 検出遺構

### A区 (Fig.7, 8, PL.7)

曲輪Iの南東縁辺部上で工事範囲境界を北辺に設定した屈曲した発掘区で、低い土壘状の高まりが伸びている。周囲の斜面の傾斜は非常に急であり、崩壊の恐れがあったため、調査不可能であった。A区の規模は幅2m前後、長さ22m、面積40m<sup>2</sup>である。

地山は関東ローム層（ソフトローム）が北東から南東にかけて緩やかに傾斜して検出され、その上に黒褐色土と黄褐色土（ローム粒主体）を重ねて水平な面を造り出していることが確認された。ローム層より上層の自然層は殆どが築城時に削平されたこと、また、ローム層の傾斜からは旧地形を推測することができる。整地は基本的に黒色と黄色の2種類の層が意識的に分けて積まれている点は何らかの意味が考えられる。同種の土の方が混合土より締まるからだろうか。なお、低土壘状の高まり部分も水平に整地された上にさらに土が積まれているが、下の整地層と同様な積み方であり、後世の盛土ではなく中世の造成であろう。そして上部は崩落或いは削平された可能性がある。これらの整地・盛土層中の特に北東部からは大量の常滑大甕の破片が集中して出土したが、それらの胎土・色調等は一様ではなく、数個体あるようである。口縁部の形態からは15世紀末～16世紀初頭の時期が考えられる（詳細は遺物の項）。

さて、城の機能した最終面は表土直下であることが考えられるが、遺構は西部で検出された落ち込み（SX-1）以外は根の攪乱により確認できなかった。

#### （SX-1）

A区西側は地表面では低土壘が切れる部分であり、その下に竪穴状の遺構が検出された。縁辺部で深い遺構の為、完掘ができなかつたが、この部分は城に伴う遺構として少なくともⅢ期あると推測される。Ⅰ期は削平したローム層上に土盛整地された面から掘り込まれた現地表面からの深さ1.5～2mの竪穴とさらにその面から60cm掘り込まれた溝状遺構である。Ⅱ期は西側に約40cm土を非常に硬く締めてフラットな面を造り出し、Ⅲ期はさらに40～80cm土を埋めて、



Fig.7 A区調査風景

東側に南北を長軸とし先端部にピットを持つ竪穴の造成の時期である。Ⅱ期に造成された硬質の土中からはA区東側で出土したものと同一個体と考えられる常滑大甕破片が出土し、15世紀後半以降の造成が考えられる。

SX-1の性格を考える時、曲輪Iの北から東側に存在する帶曲輪が南側には存在しないこと及び、後述する南側腰曲輪（C・D区）には

大量の土砂が堆積していること等から、当初は

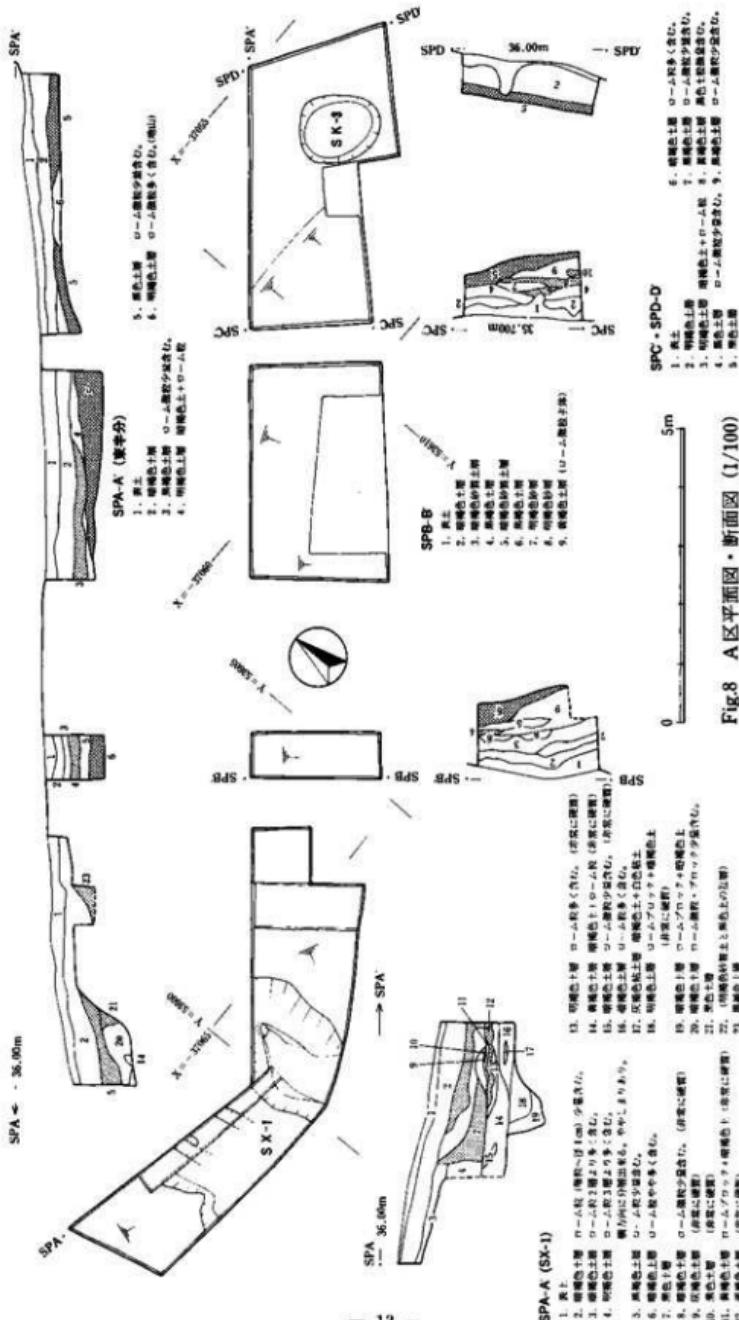


Fig.8 A区平面图·断面图 (1/100)

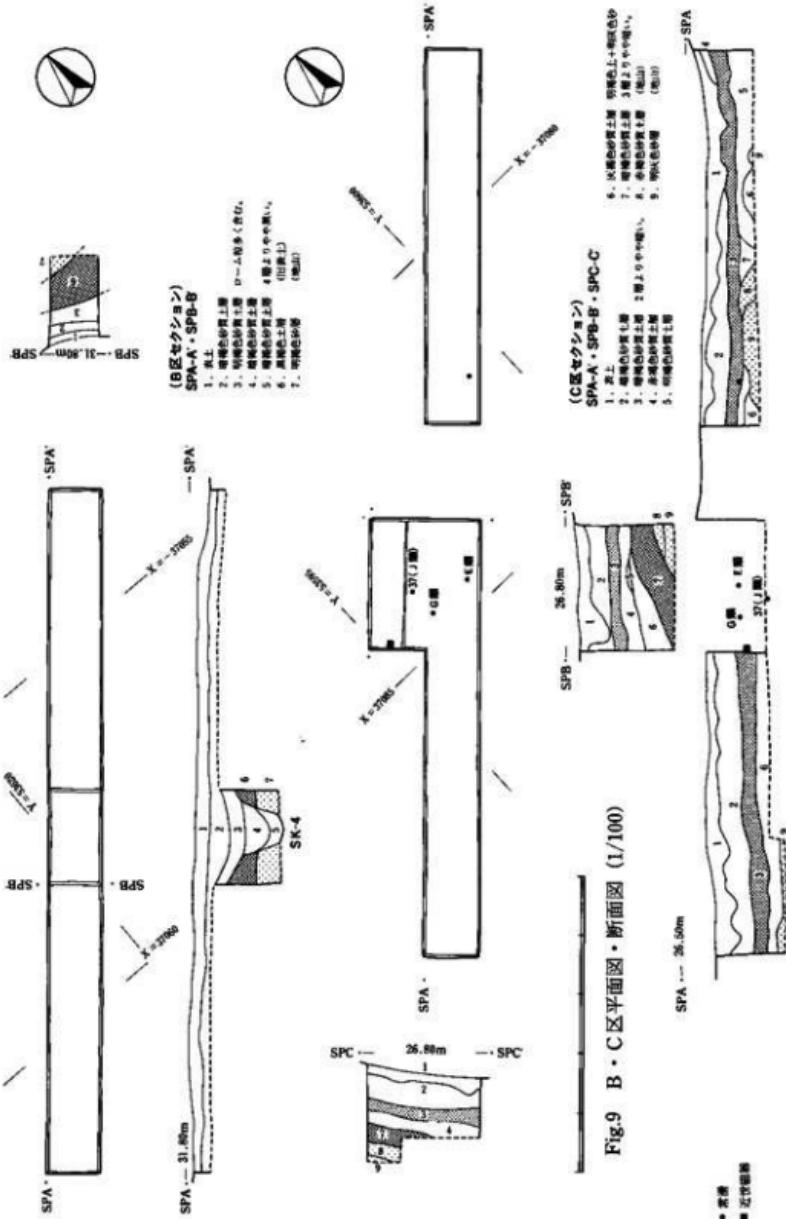


Fig.9 B・C区平面図・断面図 (1/100)

帶曲輪が南側にも存在したことが推測される。そして、曲輪 I と連絡する通路が I・II 期の遺構として該当することが考えられる。また、III 期の竪穴は堅堀として機能した可能性が考えられる。

#### (SK-3) (Fig.10)

直径 1.5m・深さ 20cm の不整円形の土坑である。焼土が充満しており、直上から縄文土器片が出土した。当概期の炉穴と考えられるが、築城に伴う造成により上部が削平されたことが推定される。

#### B 区 (Fig. 9、PL.9)

I 区の東側の腰曲輪に北東—南西方向に設定した幅 1m・長さ 11.7m のトレンチである。排水場所の確保及び斜面の崩壊防止等の為、曲輪 I 側斜面際に設定した。中世の平場としての面は表土下 20cm とみられ、落ち込みが見えた部分を下げたところ、地山層と竪穴 (SK-4) が検出された。地山の砂層 (7 層) 及び旧表土 (6 層) は北から南への急傾斜として残存しており、中世面はその上に土盛を行い水平面を造り出していることが確認できた。竪穴については制約された面積のため性格不明であるが、平場内の敵に対する障害として機能した可能性がある。なお、遺物については未検出である。

#### C 区 (Fig.9、PL.9, 10)

曲輪 I の南側の腰曲輪の東端に設定した幅 2m・長さ 14m のトレンチで一部 1m 北側へ拡張した。この腰曲輪部分も斜面の崩壊防止の為、縁辺部および斜面までは調査できなかった。地山の砂層 (8・9 層) は中央部と西側で一部検出されたが、凹凸があり不明瞭であるが、北へ拡張した部分では表土下 1.4m 以下で北東から南西に傾斜する砂層が明瞭に検出された。その上に水平になるように砂質土を土盛している。遺物については表土下 70cm に厚さ約 20cm の上下層よりやや暗い砂質土層 (3 層) 以下で常滑窯破片が数点の他、その層より上層は近世の磁器 (18 世紀伊万里) が検出されている。この 3 層は D 区でも連続して検出されており、一時期の面と考えられる。

#### D 区 (Fig.11, 12、PL.10, 11)

C 区の西側に北辺を工事範囲境として、幅 2m・長さ 16m で設定したトレンチである。当地区では地山と推測される土層は地表面下 2.5m 程の砂層 (12・13 層) であり、北西—南東方向のセクションでは曲輪 I 側から南方へやや傾斜した層が検出された。その上に 1m 以上の土砂が埋没しており水平な面を造り出そうとしている。その盛土層の最上層は C 区同様の暗褐色土層 (3 層) が連続し、遺物は 3 層以上からは磁器 (18 世紀伊万里) をはじめ寛永通寶が出土したが、以下の層から地山までは特に層に関係なく一様に中世の遺物が出土した。3 層は中世の城としての最終使用面 (廃城段階) と考えられる。D 区の遺物群の特徴は 15 世紀後半の瀬戸・美濃系陶器、瓦質土器が多いことで、常滑が大量に出土した A 区とは異なる様相を示す。

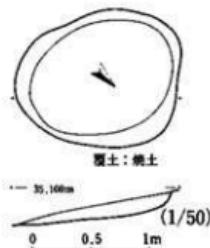


Fig.10 SK-3 平面図・断面図

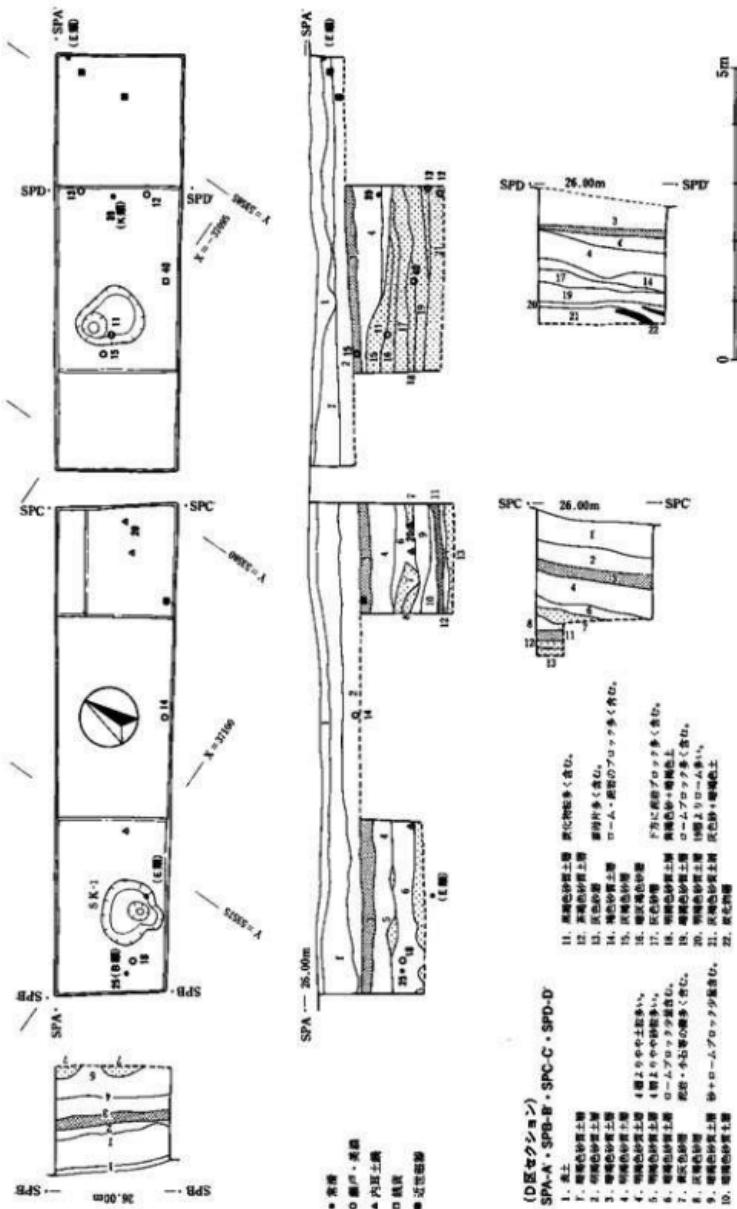


Fig.11 D区平面図・断面図 (1/100)

### (SK-1) (Fig.12)

地山層ではないが表土下1.7mの砂層中に炭化物の充满した土抗が検出された。直径約1m・深さ20~30cmである。また、覆土中から常滑壺片が1点出土した。

### (SK-2) (Fig.12)

東側でも表土下2mの砂層中に炭化物を充满した直径1m深さ30cm程の土抗が検出され、覆土中から瀬戸・美濃製品の盤(15世紀後半)と天目茶碗が出土した。また、近辺の同一レベルで同一個体が出土し、一つの面として扱えることができる。SK-1とSK-2は同様な土抗であり、レベルもほぼ一致することから、性格不明の土抗であるが、このレベル(標高24m前後、現在の表土下約2m)が15世紀後半の面と考えられる。

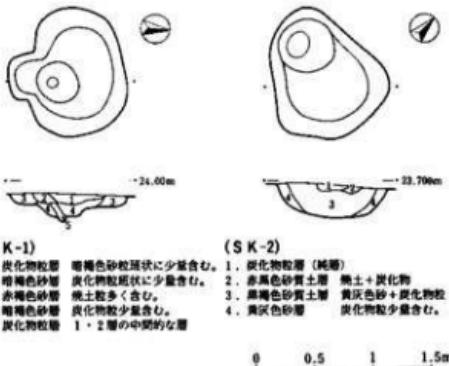


Fig.12 SK-1, SK-2 平面図・断面図(1/50)

## 7. 出土遺物

原始・古代の遺構は、今回の発掘調査区部分においては中世の築城に伴う造成により殆ど消滅したとみられ、該期の遺物の多くがローム層が残るA区出土であり、B区では皆無、土盛整地層が砂層或いは砂質土層で該期の旧表土が検出されなかったC・D区でも小数である。また、摩滅した小破片が多く、団化できたものは少なく、縄文土器と弥生土器の判別は確実ではない。

土器類の破片総数は258点、各時期の破片数及び割合は次の通りである。縄文土器5点・約2%、弥生土器86点・約33%、土師器69点・約27%、須恵器6点・約2%、かわらけ5点・約2%、瓦質土器14点・約5%、瀬戸・美濃系陶器12点・約5%、常滑産陶器55点・約21%、近世磁器6点・約2%である。その他、金属製品、自然礫が若干出土している。

### 縄文土器 (Fig.13, 1~3, PL.12)

1は単節LR縄文が施文された口縁部で早期・花輪台式とみられる。2は刺突文が施文される。後期・称名寺2式とみられる。3は単節RL縄文が施文される。後期・加曾利B式とみられる。1, 2はA区、3はD区出土である。

### 弥生土器 (Fig.13, 4~6, PL.12)

いずれもA区出土で、弥生時代後期に属するものとみられる。4はRL単節縄文が施文される。5は折り返しの口縁部で口唇部上面にも縄文が施文される。6は撚糸文が施文される。また、赤彩された破片も多い。

### 土師器 (Fig.13, 7, PL.12)

器面に刷毛目が施され、古墳時代初頭の壺型土器とみられる。A区出土。他に、杯に明確な棱を持つもの等古墳時代とみられるものが主体を占める。また、底部回転糸切り痕を残す杯も出土しており、奈良・平安時代の遺構の存在も推定される。

### 須恵器 (Fig.13, 8, PL.12)

褐色を呈する在地産の須恵器で甕の肩から胴部にかけての部分とみられる。A区出土。時期は不詳である。

### かわらけ (Fig.14, 9~10, PL.13)

数は推定5個体と小量であるが、2つのタイプに分類できる。9, 10はいずれもA区の土盛整地層中から出土した。9は推定口径7.5cm・推定底径5.0cm、ロクロ成形（右回転）、底部糸切り痕、浅黄橙色。10は推定口径6.8cm・推定底径6.0cm、ロクロ成形（左回転）、底部糸切り裏、内面の見込み部外周から口縁にかけて強くなでられやや内湾する。にぶい黄橙色。なお、口径と底径の差が9は大きく10は小さく、底部厚は9が5mm程、10が8mm程と差がある。

### 瓦質土器 (Fig.14, 20, PL.12)

全体の2/5の内耳土鍋の破片である。推定口径26.0cm・底径14.0cm・器高14.5cmで底部はやや膨らむ。内耳は1つしか出土しなかったが、両側に2つずつ並べた計4つと推定される。なお、実測図の内耳の位置は便宜的なものである。底部の形態から15世紀中葉に比定できる。<sup>(21)</sup>

### 瀬戸・美濃系陶器 (Fig.13, 11~18, PL.13)

全てD区出土。11~13は三足盤（折線深皿）である。11は外側に折れる口縁部で、内外面とも灰オリーブ色の灰釉が施される。12は同一個体ながら接合しない2点の破片を図上で復元接合した図である。外面に沈線が巡り、内外面オリーブ黄色の灰釉が施される。13は口縁部内側に突起を持つ。釉は白色である。14は平碗とみられる。内外面オリーブ黄色の灰釉が施される。15は器の脚部と考えられる。沈線が2条巡り、オリーブ黄色の灰釉が施される。16は天目茶碗であろう。内外面に鉄釉が施され、褐色から黒色の釉が施される。17、18は擂鉢である。擦り目の単位の密度は粗である。外面黒褐色の鉄釉である。以上は15世紀後半に比定できる。<sup>(22)</sup>

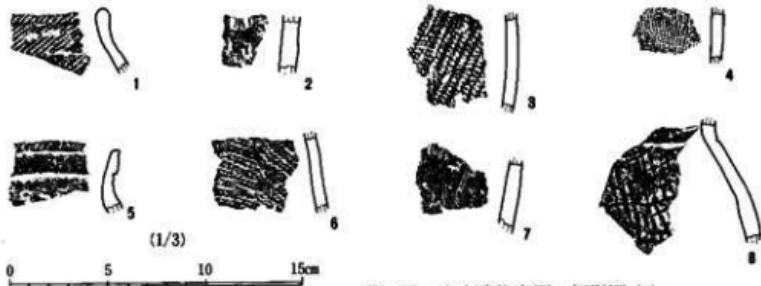


Fig.13 出土遺物実測・拓影図 (1)

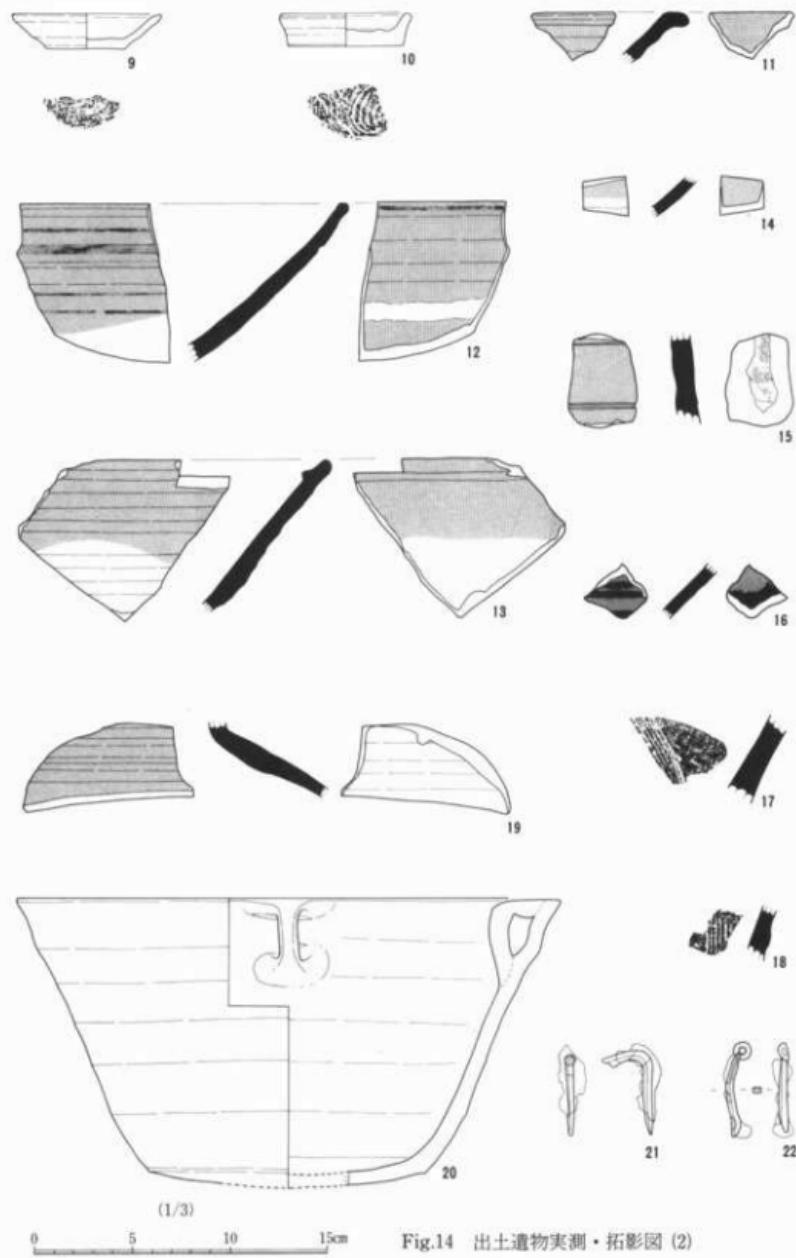


Fig.14 出土遺物実測・拓影図 (2)

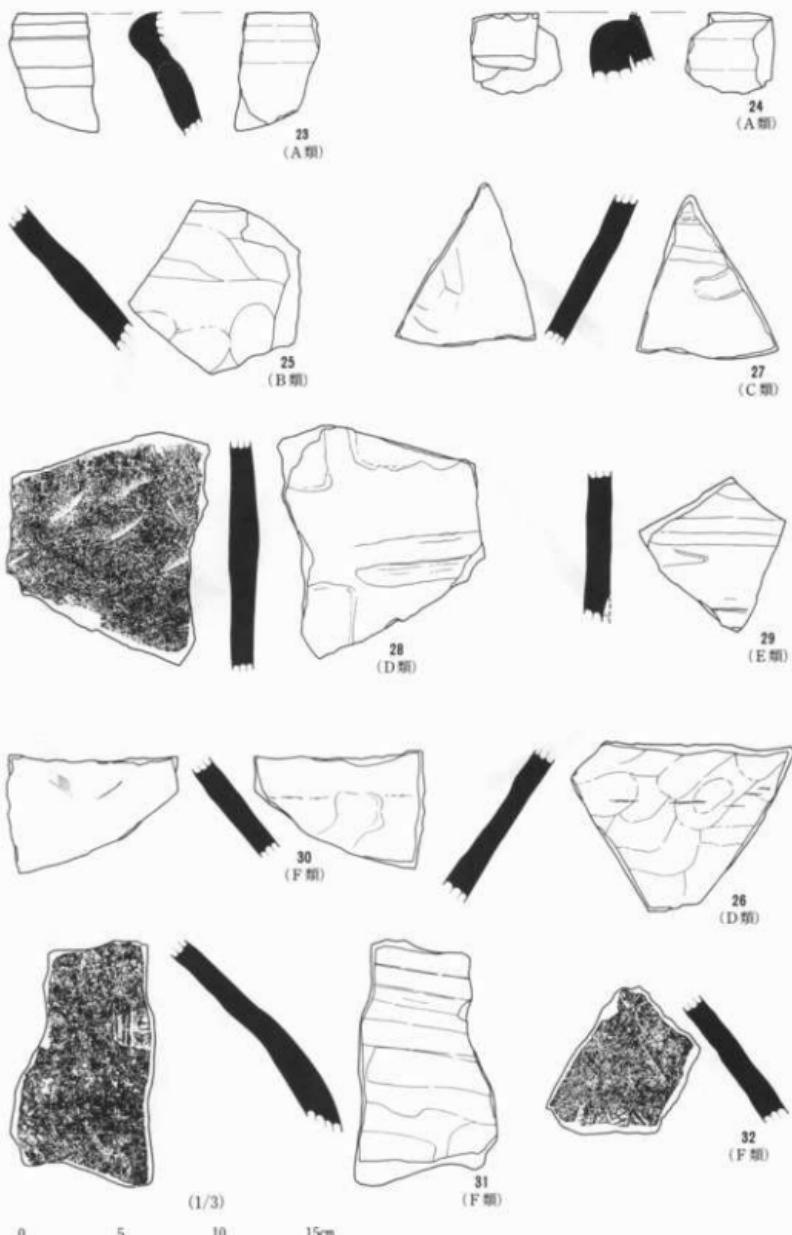


Fig.15 出土遺物実測・拓影図 (3)

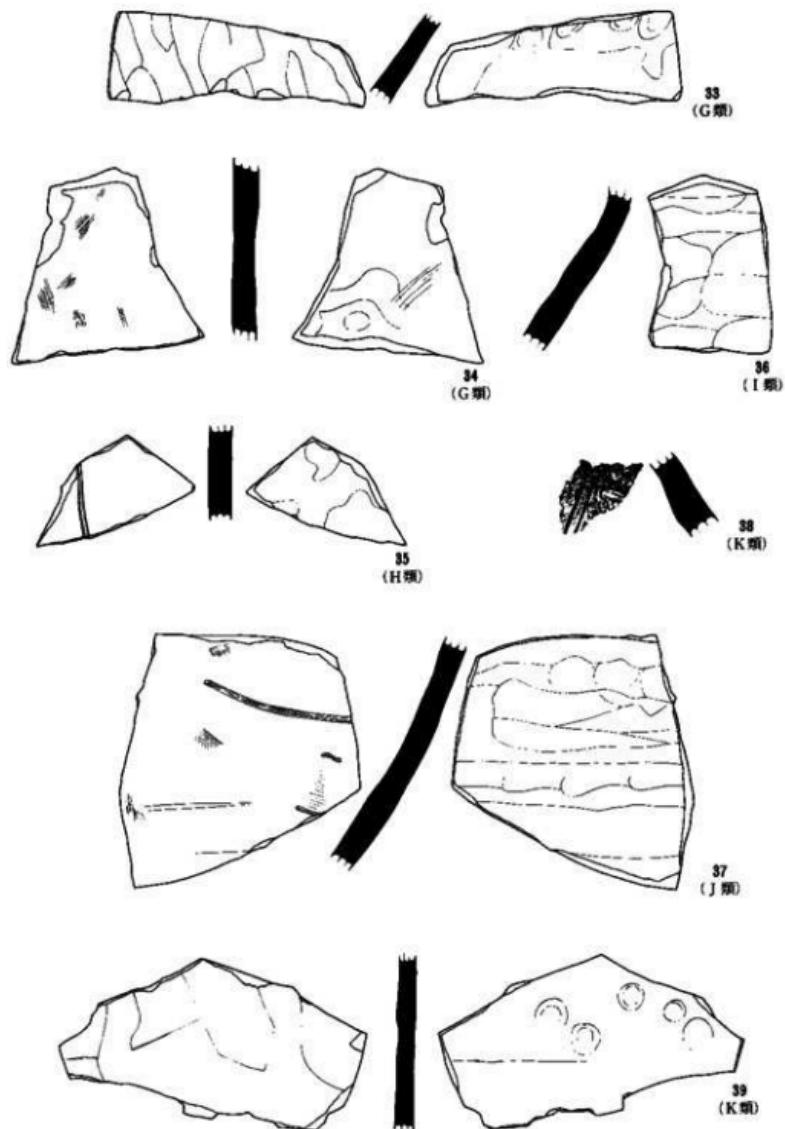


Fig.16 出土遺物夾測・拓影圖 (4)

#### 中国製陶器 (Fig.14, 19, PL.13)

四(三)耳壺の肩部と考えられる。外面黒褐色から淡黄色の褐釉、内面は無釉の暗灰黄色である。時期は不明。A区出土。

#### 常滑焼 (Fig.15・16, 22~39, PL.14・15)

殆どがA区土盛または削平した整地上からの出土で、特に東側に集中し、全て大壺の破片と推定されるが、胎土・色調等を比較した結果以下の特徴から13種類 (A~K類) に分類した。同一個体の色調等のむらを考慮すると実際の個体は分類より少ないが、8個体以上は考えられる。なお、含有物は全て長石・石英微小石を多く含むが、特にE類に多い。

A類 大壺口縁部、外面暗赤褐色、内面にぶい赤褐色、テカリ有り。

B類 胎土・色調はA類に近似。同一個体の可能性有り、テカリ有り。

C類 外面にぶい橙色、内面にぶい褐色、テカリ無し、A類と同一個体の可能性有り。

D類 外面暗赤褐色～灰赤褐色、内面灰褐色、テカリ無し、A類と同一個体の可能性有り。

E類 外面自然釉のテカリ、内面灰色地に橙色が粒状を呈する。

F類 外面灰褐色、内面湯灰色、白色自然釉が粒状を呈する。

G類 外面灰黄褐色、内面灰褐色、テカリ無し。

H類 内外面にぶい赤褐色、テカリ無し。

I類 外面にぶい赤褐色、テカリ有り、粒状の縁の自然釉、内面灰黄褐色。

J類 内外面にぶい橙色、テカリ無し。

K類 内外面黄灰色で、須恵器質、テカリ無し。

また、各破片の特徴としては、28 (D類) の外面に成形・調整の際に使用したとみられる板状工具 (ヘラ) の先を押し当てた跡がつき、31、32 (F類)、38 (K類) には押印が刻されている。これらはいずれも肩の部分にあたるものであろう。なお、実測図には成形・調整の際に板状工具でなでた痕跡を記した。時期が比定できるものとしては、A類の口縁部しかない。口縁部は内傾して外側に折り返されて器壁に付いてから再び上に折られるN字状を呈するが、器壁との隙間が若干存在する。小片であるため、確実な時期は不明であるが、15世紀末から16世紀初頭のものと考えられる。<sup>(23)</sup>

以上の様なそれぞれの特徴を持った常滑大壺の異個体の小破片が、1個所に集中して出土したこと、複数個体が意識的に割られて一括廻棄されたことが想像でき、また、C・D区の土盛整地層中からもA区出土と同一個体に推定される破片が出土したことは注目できる。

#### 鉄製品 (Fig.14, 21~22, PL.12)

22は鉄釘である。頭部が欠損しているので具体的な種類は不明であるが、断面は正方形を呈する古代から近世のものである。A区土盛整地層上出土。22は長さ5.0cm、両端に穴の開いた円盤が付く。棒状の部分の断面は長方形である。革帶に付属する鉤具の外枠の可能性がある。

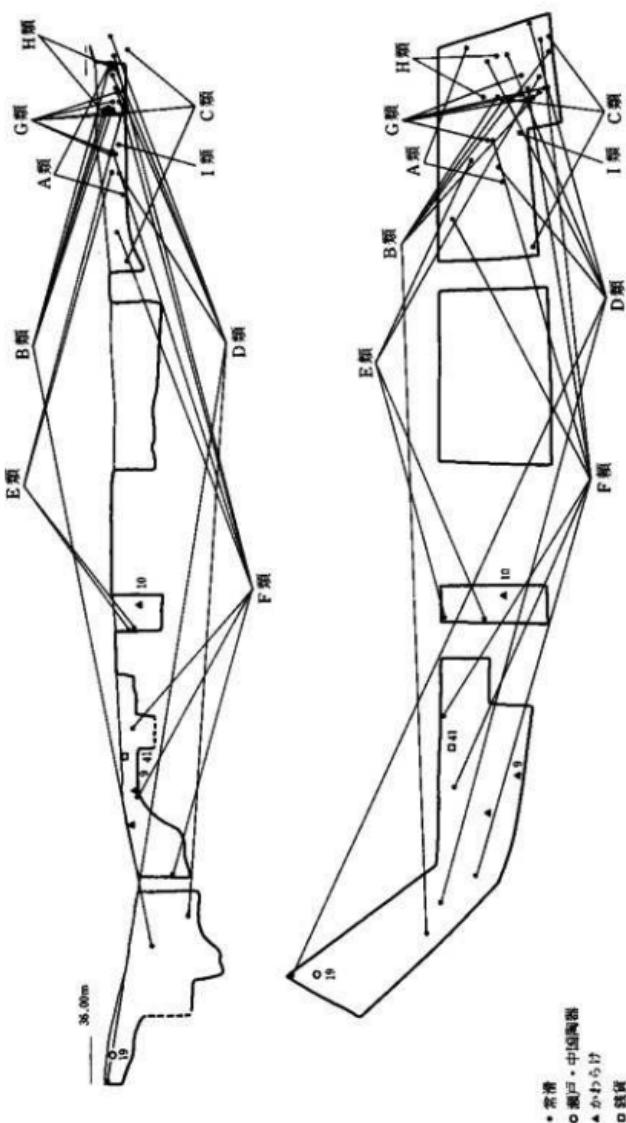


Fig.17 A区遺物分布図

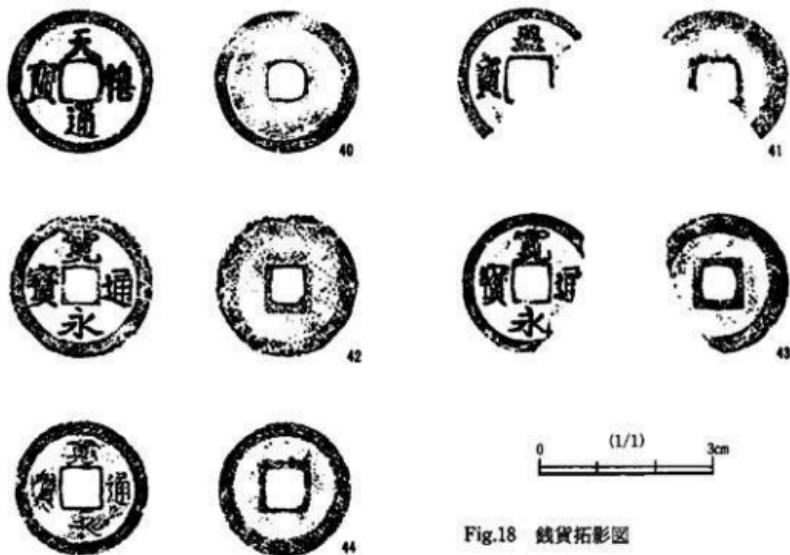


Fig.18 錢貨拓影図

番号	錢貨名	初鋤年等	W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	t(mm)
40	天禧通寶	北宋 1017	3.36	25.25	21.35	7.97	6.12	1.43	0.26
41	皇宋通寶	北宋 1039	1.37	(24.5)	(21.0)	(8.2)	(7.2)	1.19	0.25
42	寛永通寶	(古) 1637	4.44	25.30	24.50	6.70	5.25	1.37	0.31
43	寛永通寶	(古) 1637	2.37	24.50	20.30	6.95	5.80	1.39	0.32
44	寛永通寶	(新) 1736	2.09	23.30	19.25	7.70	6.50	0.44	0.51

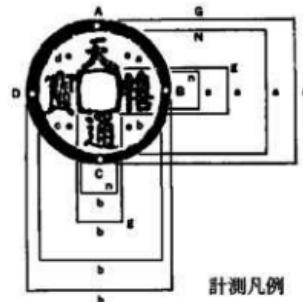
Tab.1 錢貨計測表(下図計測点の平均値、T(t)は厚み)

#### 錢貨 (Fig.18, Tab.1, 40~44, PL.12)

40、41はA区表土下から出土した北宋錢であり、曲輪Iの中世最終面が表土直下であることが推定できる。

42、43、44はD区表土中から出土した寛永通寶である。

42、43は同じ木の根元から出土したことから、中世城郭の廃城後に造られた近世の墓（土葬）が考えられる。なお、全体や文字の形状から初鋤年を推定した結果、42、43は17世紀前葉、44のみ18世紀前葉に下るものである。<sup>(24)</sup>



## 8. 結語

最後に歴史的環境、山室城の構造、発掘調査の結果それぞれから導き出された点をここでまとめてみたい。

文献上また、周辺城館跡から言える山室城の歴史は、同城を本拠とした在地領主山室氏が16世紀前葉（1532年）に飯櫃城へ移動したという伝承があり、この時期は山室氏・井田氏等が谷津田地域から栗山川下流域の広い沖積地域に進出した時期であること、しかしながら、16世紀後半の山室城については不明であること等である。

また、山室城の構造からは、古い様相と新しい様相があり、基本的には曲輪Iが15世紀後半から存在したが、その後隨時改造・拡張して、曲輪IIの西側、曲輪IIIの構造、また、外郭部の存在は当城が16世紀後半まで使用されたことが窺われるものである。さらに、曲輪Iの南側斜面にも北側と同様、かつては腰曲輪が存在した可能性を示唆できる。

そして、発掘調査は曲輪I及び周辺の南側縁辺部に限られた小規模なものであったが、15世紀中葉から16世紀前半の造成の様子が明らかとなった。まず、曲輪I上はローム層より上層を削平し、曲輪内部の面積を確保するために縁辺部斜面に盛土を行っており、整地上からは15世紀末から16世紀初頭の大量の常滑大甕破片が出土した。そして、下方との連絡のための通路が検出されたが、ある時期に埋められていることが確認された。また、腰曲輪は築城以前の旧表土と考えられる黒色土を含まない砂及び砂質土が2m前後も大量に盛土され、15世紀中葉から後半の瓦質土器、瀬戸・美濃系陶器が多く含まれていたが、曲輪I上の遺物（常滑大甕）と同一個体とみられるものも出土した。

これらの結果から、15世紀中葉以前に曲輪Iの南側に地山（砂層）を削り出して造られた帶曲輪が存在したが、16世紀前半に崩されて腰曲輪に盛土されたことが推測される。これは、腰曲輪の高さ及び面積の拡張を目的としたことが考えられる。また、曲輪I・腰曲輪の出土遺物の分布状況及び傾向からは、食器系容器である瓦質土器や瀬戸・美濃系陶器と貯蔵容器である常滑系陶器を意識的に別々に廃棄していること、特に常滑は数個体の小破片が集中して出土しており、故意に碎いて一括して廃棄したことが推測される。

以上、山室城の構造は16世紀後半まで使用されたことを推測させるものであるが、発掘調査では確実に16世紀後半まで下る遺物は出土しなかった。しかし、伝承（『山室譜伝記』）中では山室氏の飯櫃城移動の時期であり、確実な史料や周辺の城からも窺える井田氏の移動の時期でもある16世紀前半に、山室城においても曲輪Iその他で大規模な改造が行われたことが判明し、この時期が山室城にとっても少なくとも一つの画期であったことが明らかとなった。急傾斜地崩壊対策事業範囲という限定された調査であったが、今後の山武地域の歴史を解明していく大きな材料となったことが、止むを得ず一部を失う山室城にとっては幸いであった。

## 注

- (1), (3), (5), (8), (9) 「松尾町の歴史 上巻」 松尾町 1984年
- (2) 戸田哲也、平岡和夫『小池麻生遺跡』 山武考古学会 1976年
- (4) 鹿淳一『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』 千葉県教育委員会 1990年
- (6) 『吾妻鏡』 宝治元年(1247) 6月7日条
- (7) 「元和古活字那波道圖本」「諸本集成 倭名類聚抄」 京都大学文学部編 臨川書店 1968年
- (8) 『千葉県史料 中世編 本土寺過去帳』 1985年
- (10) 『改訂房總叢書』 第1輯第3巻 所収
- (12) 『豊岡村誌』 大橋栄 豊岡村郷土誌研究会 1956年 所収
- (13) 『千葉県史料 中世編 諸家文書』(300~340) 1962年
- (14) 上杉家文書『新潟県史 資料編3 中世1』(304) 1982年
- (15) 天正2年千葉氏黒印状『旭市史 第3巻』(戦国期千葉氏関係文書)(92) 1975年
- (16) 『中山法華経寺史料』 中尾 奥 吉川弘文館 1968年
- (17) 年次未詳北条氏政書状写『神奈川県史 古代・中世 3下』(9626) 1979年
- (18) 平岡和夫他『高砂城址調査報告』 松尾町教育委員会 1977年
- (19) 毛利家文書『群馬県史 資料編 中世3』(3571) 1986年
- (20) 柴田龍司『千葉県中世城跡研究調査報告書第7集  
-飯櫃城跡・鎌木城跡発掘調査報告-』 千葉県教育委員会 1987年
- (21) 大江正行『清里・陣馬遺跡』第5章第2節中世の遺物 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982年
- (22) 藤沢良祐『瀬戸古窯址群II-古瀬戸後期様式の編年』  
『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』 1991年
- (23) 赤羽一郎『考古学ライブラリー23 常滑焼』 ニュー・サイエンス社 1984年他を参考に文献から時期を特定できる千葉県内の中世城跡出土の常滑を検討の結果。
- (24) 『日本貨幣型録 1988年版』 日本貨幣商協同組合 1987年

## 参考文献

- ・『日本城郭大系 第6巻 千葉・神奈川』 新人物往来社 1980年
- ・『角川日本地名大辞典 12 千葉県』 角川書店 1984年
- ・『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)-千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区-』 千葉県教育委員会 1986年
- ・柴田龍司『戦国末期の城郭から見た権力構造』『(財)千葉県文化財センター研究紀要10』 1986年
- ・『図説 中世城郭事典 1』 新人物往来社 1987年
- ・伊藤一男『房總戦国期土豪の終焉』第4章第1節(上総井田氏の系譜と史料) 善書房 1991年

# 写 真 図 版

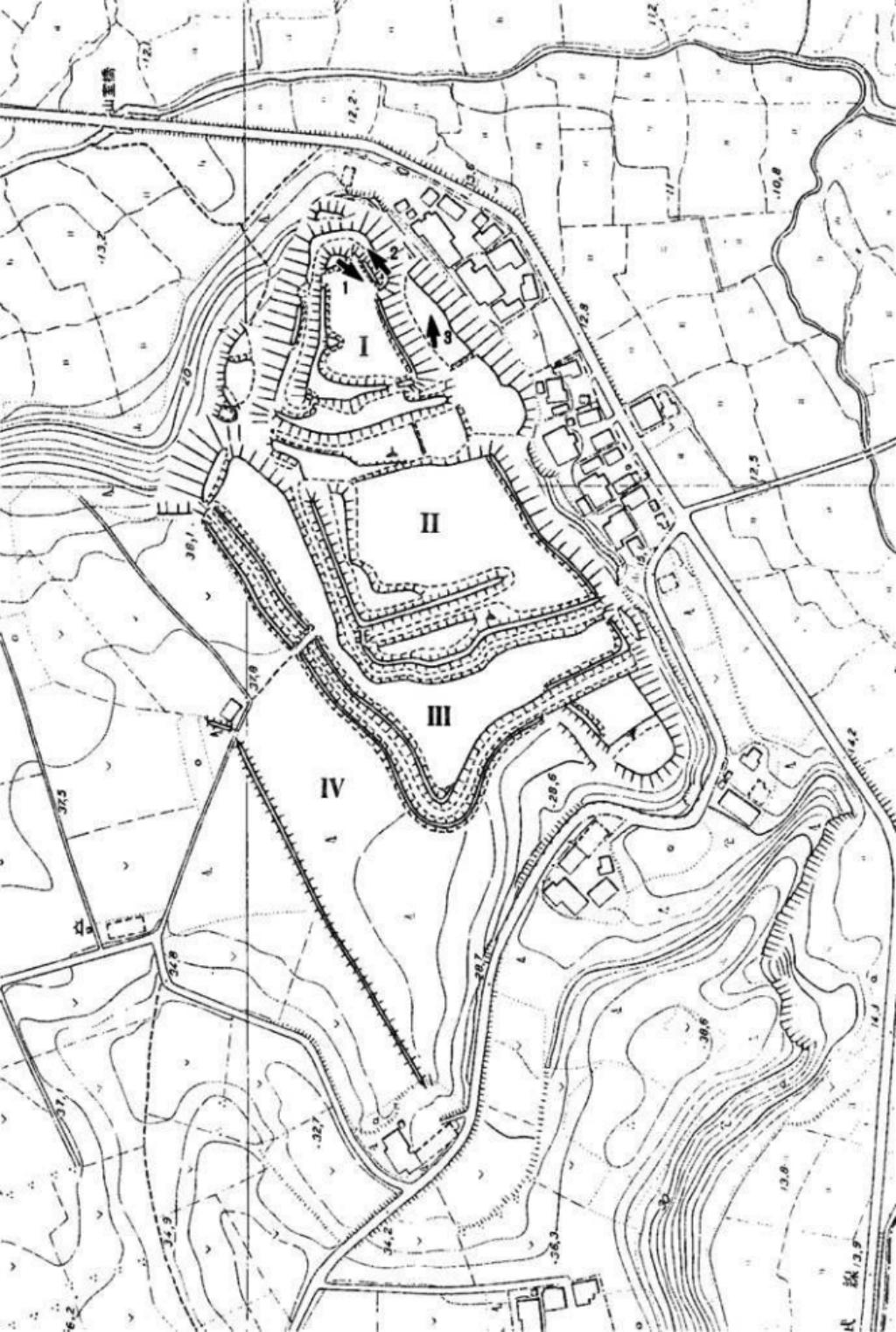
山室城跡



(1) 山室城跡遠景 (南東から)



(2) 山室城跡遠景 (北から)





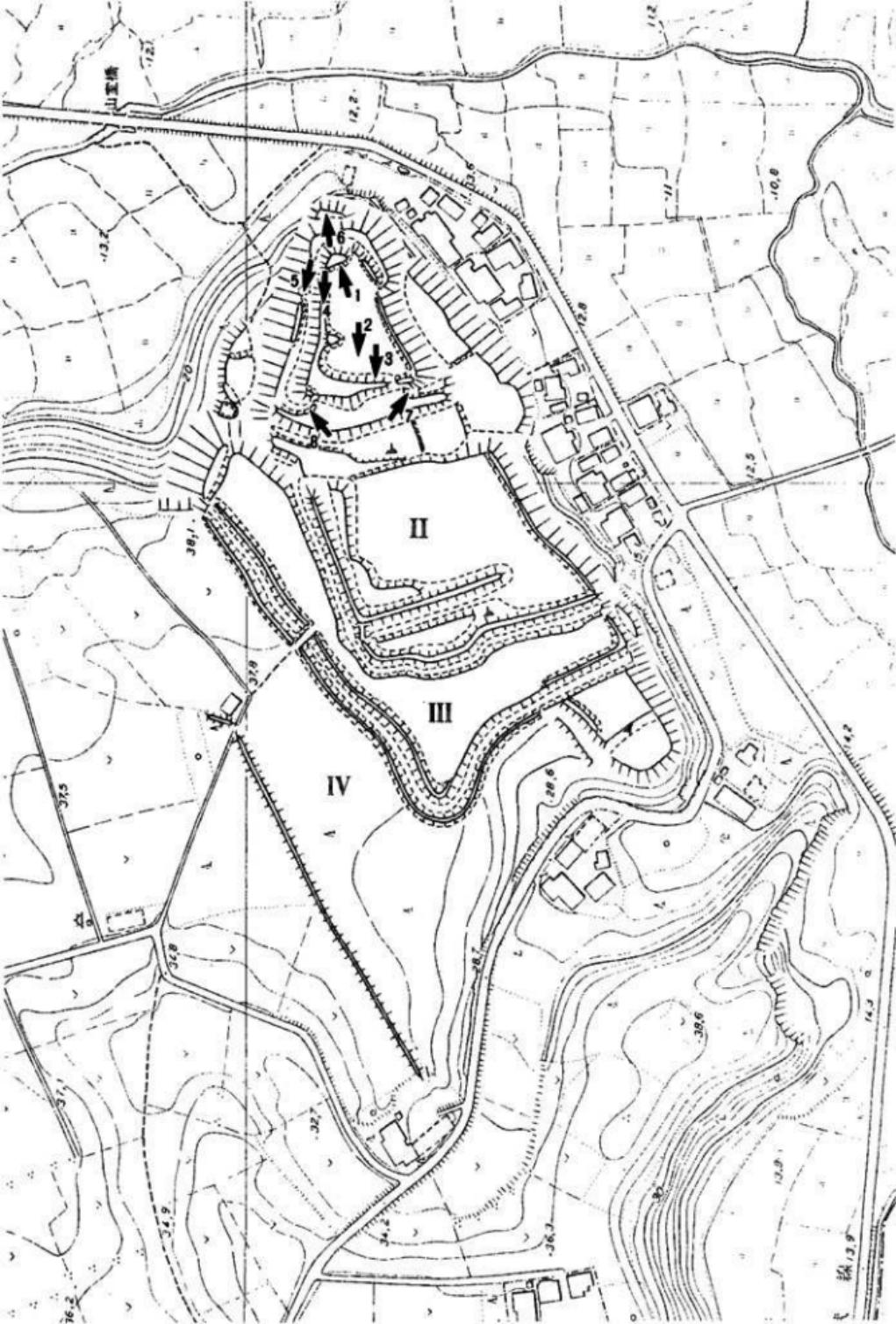
(1) A区調査前（北東から）



(2) B区調査前（南西から）



(3) C・D区調査前（西から）





(1) 曲輪 I 東端部檜台（西から）



(2) 曲輪 I 内（東から）



(3) 曲輪 I 内西側土堀（東から）



(4) 曲輪 I 内北側土堀（東から）



(5) 曲輪 I 北側帶曲輪（東から）



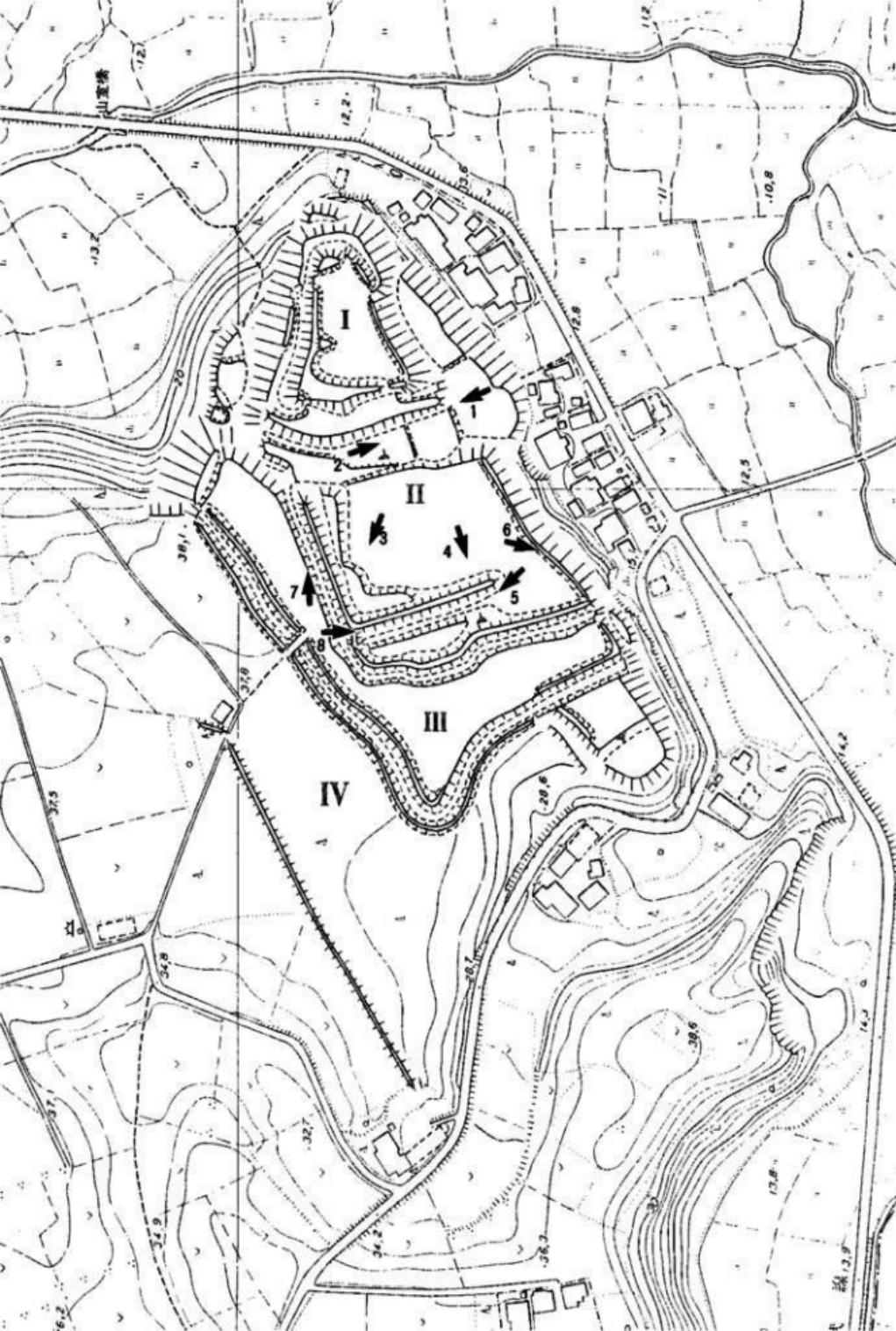
(6) 曲輪 I 東側平場（西から）



(7) 曲輪 I 南西の堅堀（北西から）



(8) 曲輪 I 北西の堅堀（南西から）





(1) 曲輪I・II間の空堀（南から）



(2) 曲輪I・II間の空堀（北から）



(3) 曲輪II内北側の土堀（南東から）



(4) 曲輪II内の土堀（東から）



(5) 曲輪II内の土堀・空堀（南東から）



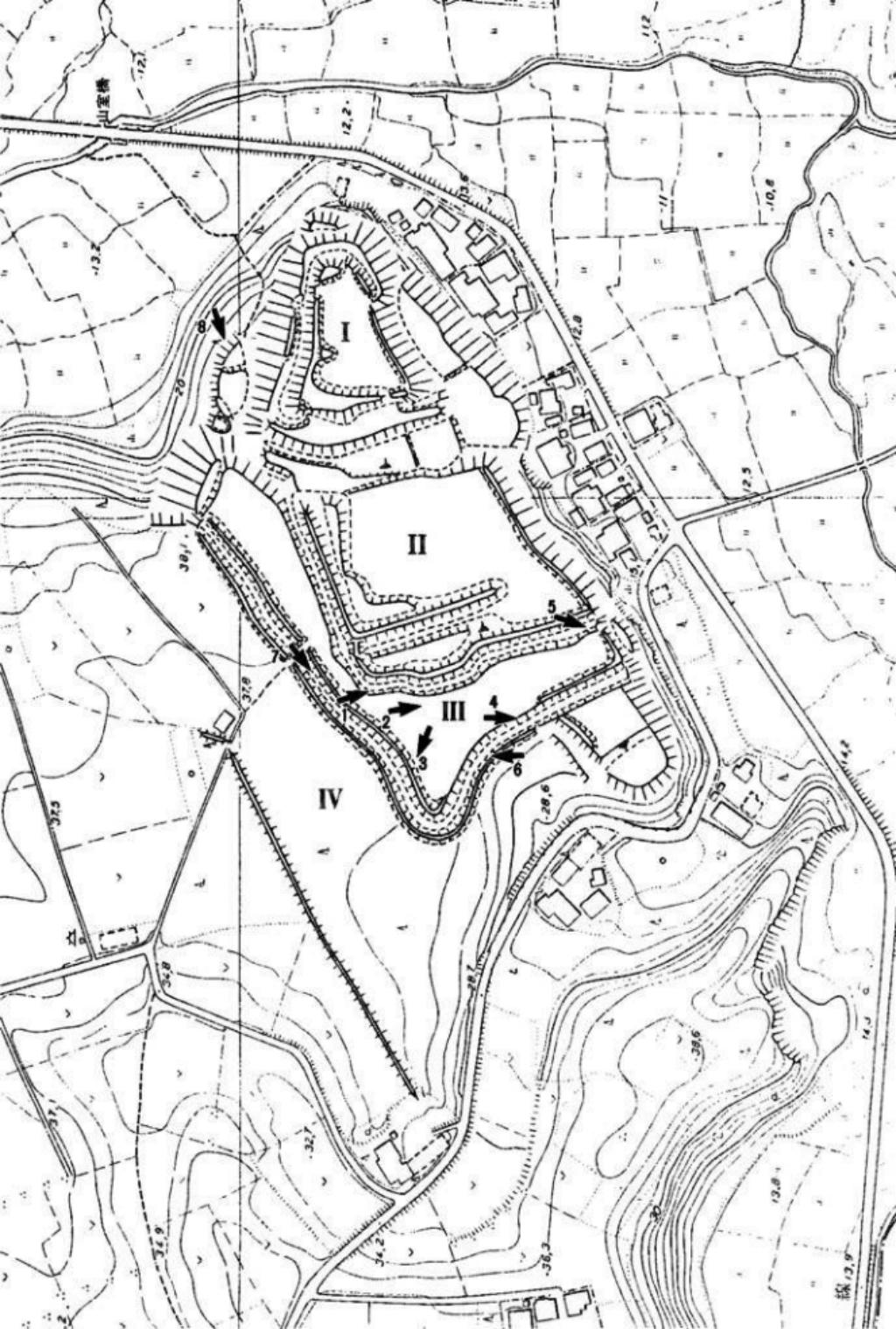
(6) 曲輪II内南側の土堀（北東から）



(7) 曲輪II北側の空堀・土堀（北西から）



(8) 曲輪II北西部の土堀・空堀（北から）





(1) 曲輪II西側の土壘・空堀（北から）



(2) 曲輪III内（北から）



(3) 曲輪III内北西部の土壘（南東から）



(4) 曲輪III西側の空堀（北から）



(5) 曲輪II・III間の空堀（北東から）



(6) 曲輪III西側の空堀（南から）



(7) 曲輪III北側の空堀（北東から）



(8) 曲輪I北側の段（東から）



(1) A区全景（北東から）



(2) A区全景（西から）



(3) SX-1全景（東から）



(1) SX-1 (南から)



(2) A区遺物出土状況  
(西から)



(3) SK-3 全景 (東から)

(1) B区全景 (南西から)



(2) B区深掘個所 (北東から)



(3) C区全景 (西から)





(1) C区セクション及び  
遺物出土状況



(2) D区全景（南西から）



(3) D区セクション及び  
遺物出土状況



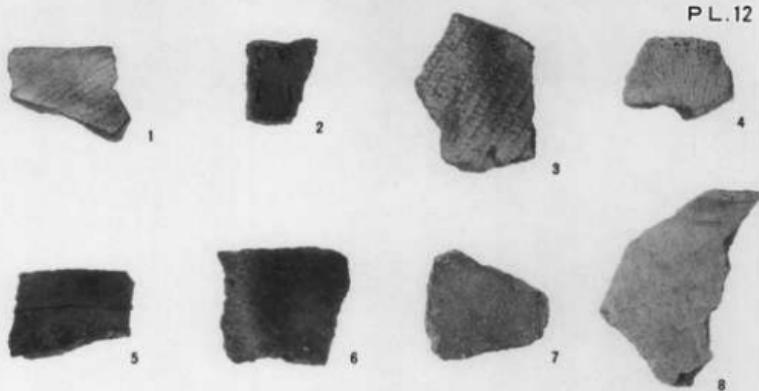
(1) D区セクション



(2) SK-1全景（北東から）



(3) SK-2全景（南東から）



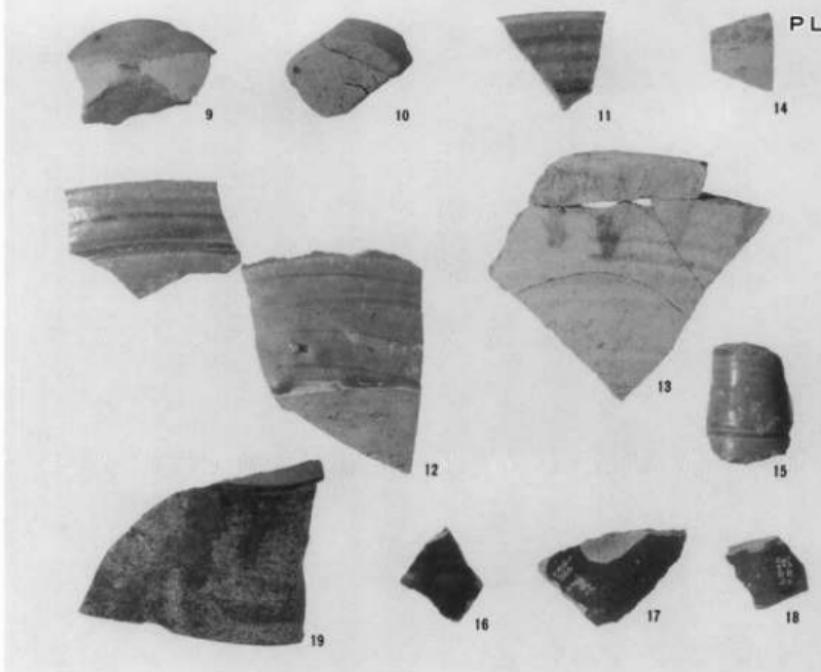
(1) 土器類（古代以前）



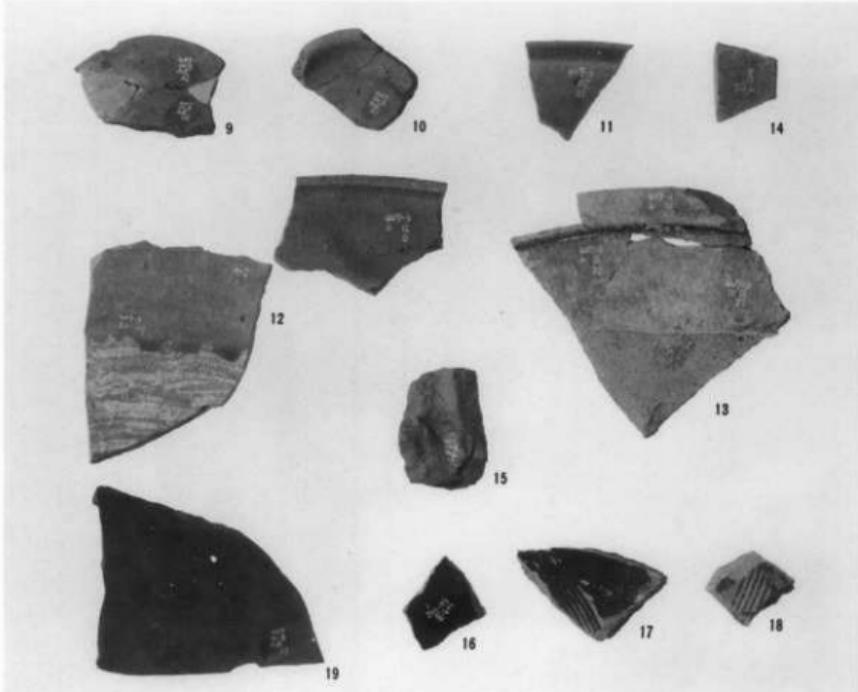
(2) 内耳土鍋



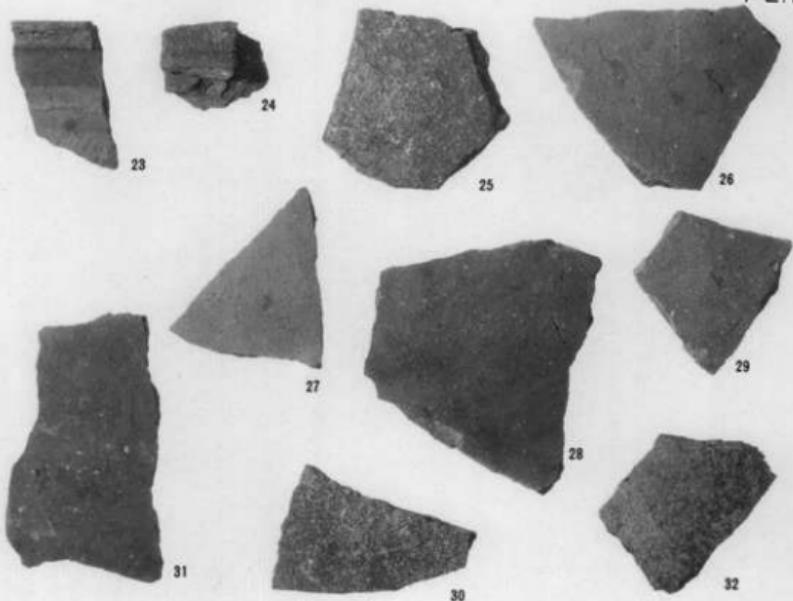
(3) 金属製品（鉄釘、銅錢他）



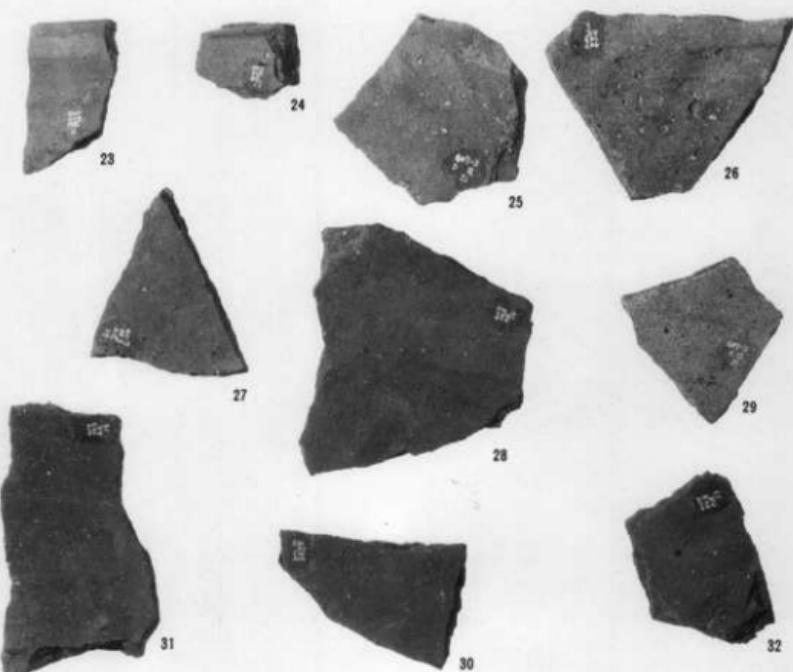
(1) かわらけ、瀬戸・美濃系陶器（外面）



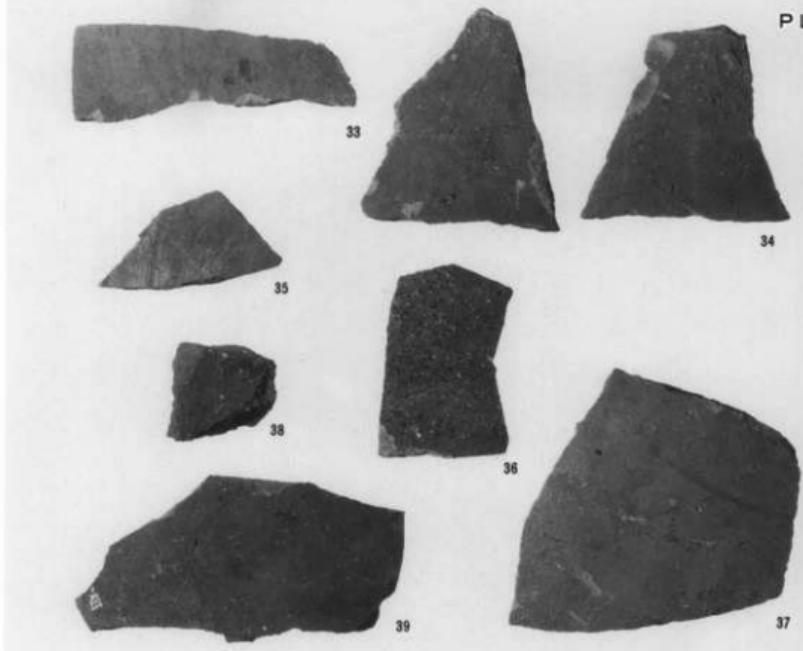
(2) かわらけ、瀬戸・美濃系陶器（内面）



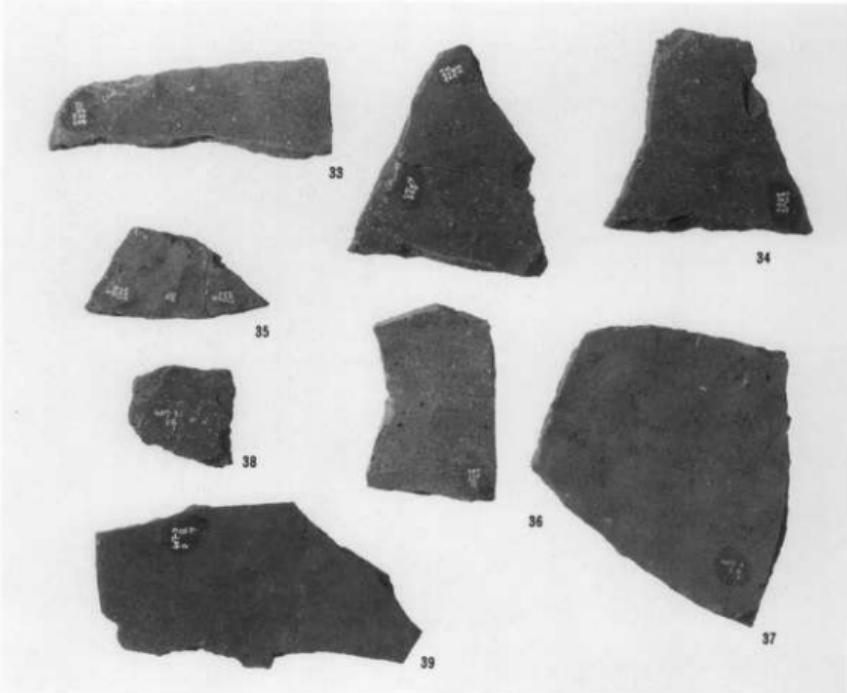
(1) 常滑A~F類 (外面)



(2) 常滑A~F類 (内面)



(1) 常滑G～K類 (外面)



(2) 常滑G～K類 (内面)

千葉県文化財センター調査報告第212集

**松尾町山室城跡**

---

平成4年3月18日 印刷

平成4年3月25日 発行

発行 千葉県土木部  
千葉市市場町1丁目1番  
編集 財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡無番地  
印刷 株式会社 弘文社  
市川市市川南2丁目7番2号

---